



蘭使日本紀行

三

ル 3  
1140  
3





扉 3  
號 1138  
卷 16

門 3  
號 1140  
卷 3



豆此途上大寺トランガ堂ノ外見ル一キ者ナシ上  
層ノ屋脊ノ四方ニ卧牛ヲ置ク牛身裂光ヲ放ツ  
蓋シ鍍金セルナリ屋脊ノ四方ニ張り出ス一壁  
外各六尺構造ノ全体四角ナリ各面ニ四大柱ヲ  
建ツ日本勇將ヲ画ク其事業ヲ歌曲ニ演シ途上  
ニモ屋内ニモ之ヲ唱テ施物ヲ求ム摺戸ノ上ニ  
ハ半ハ窓ヲ開ク上邊ハ低レ下リタル屋脊ノ下  
ニアリ下邊ハ摺戸ノ上ニアリ四方ハ白堊ニテ  
塗ル外面ハ四方壁ニテ回ム石ニテ疊ム斜ナル  
護胸壁トナル内壁ハ平滑ニ塗壤ス其傍ニ主僧



トランガ堂。

ノ宅アリ。屋脊ノ尖端ハ塔ノ如ク。堂上ニ聳ユ。此堂内ニ安置スル佛像ヲトランガト名ク。是致百年前ニ於テ。支那帝ヒアオヒユス氏。彼半島ナル高麗ヲ服從セシメ。シカ為ニ。衆兵高麗ノ首府。ポレグヤンクヲ圍ミタル中ニ大ニ之ヲ防拒スルニ盡カセシメ。人ナリ。其後韃靼人ノ為ニ。高麗大ニ困苦セシキニモ。又朱ノ零落ニ就テモ。大ニ國事ニ功勞アリシ人ナリ。朱ハ高麗人。日本人。支那人ノ家具ヲ塗ル所ナリ。日本ト高麗ト多年ノ戰爭ノ後トランガハ日本人取テ以テ軍神ト為ス。

八道。

京畿。

ホアンシヤ  
キアンギエシ  
シウエンロ  
キングサン  
カンエイシダ  
カカキウリ  
ビンガン

所ナリ。此時トランガ。高麗ノ為ニ用テ為サス。故ニ日本ニ舟送セリ。高麗全國争亂止マヌ。暴人横行シテ。百物兵火ニ罹レリ。トランガ亦此災ヲ免カレス。是ニ於テ高麗全國ヨリ加勢ヲ招集ス。當時之ヲレアスチエングト名ク。各地ヨリ人員ヲ送レリ。京畿道ニ首府ビングヤレグアリ。最モ先ツ多勢ヲ舟送シテ。日本兵ヲ衝カシム。他ノ七道。ホアンシヤ。キアンギ。ユエン。シウエン。ロキン。グサン。カンゴイン。ダ。カオキウリ。及ビンガン。亦多勢ヲ募テトランガノ為ニ力ヲ盡ス。終ニ日本



人ニ向テ戦フ。此時トランガ將軍タリ。以テ日本ノ猛將八人及其加勢ヲ討ツ。故ニ其像ニ八臂アリ。手中コノツ。先太ノ捧。劍。大鍼。刀。挺。弓。鎗。拵。ヲ執ル。而ノ敵ニ對立ス。敵ハ左手ニ斧ヲ執リ。將ニ打ントスルノ状ヲ爲シ。左足ニテ銅製ノ噴火蛇ノ中身ヲ踏ミ。右足ニテ尾ヲ踏ム。此トランガト暴人トノ間。稍後方ニ長四角ノ壁アリ。前面ニハトランガノ兵器ヲ刻ス。又一白牛アリ。四足ニテ走ル。此武器ノ下ニ一所アリ。日本字ヲ記ス。次ニ弟ニノ臺アリ。冠ヲ戴クノ一人坐ス。鹿ヲ伴フ。抑モ

牛ト鹿トハ。共ニ高麗人ノ神事スル所ナリ。皆高臺上ニアリ。装飾善美ヲ極ム。其下ニ立派ナル四角柱アリ。此トランガハ日本武將ノ一ナリトス。大ニ軍効アリ。分裂セル諸國ヲ一手ニ掌握ス。蓋シ歲月ヲ經ルニ隨テ。日本人之ヲ一佛トスル所ナリ。

又(見)バサンヲウモ。往時ハ一軍神ナリトメ。獨逸人ノ尊奉スル所ナリ。トリテミウス氏曰ク。バサンヲウハシカムベルスノ王ナルシカクレスノ季子ナリ。父王ノ位ヲ緇ク。大戦効アリ。トリトルト



ノンツ人民ノ爲ニ身命ヲ抛テ。猛將クボレ。ン  
氏ヲ討テ其國ヲ奪領セリ。バサンヲウ在位三十  
六年。神事セラルルノ衆誓ヲ得タリ。之カ爲ニ議定  
スルノ日ヲ公告ス。衆人皆盛服シテ集會セリ。既  
ニノ忽然身ヲ隱ス。衆其行ク所ヲ知ラス。以テ天  
ニ登ルトス。是古代ヨリ釋教徒ノ軍神ナリトス  
ル所ナリ。  
アリシウス氏及ブルトクホルスト氏ハトラン  
ガ寺ヲ側ニ見テ。漸ク進テ藤澤ニ着シ。戸塚程ケ  
谷ヲ過キ。神奈川ニ至リ。茲ニ一泊セリ。翌朝上途

將軍家ノ女  
内裡入輿

寒ヲ侵シテ。海岸ニ沿テ進行ス。日午ニ立派ナル  
將軍家貴女ノ行装ヲ觀ルヲ得タリ。是將軍ノ女  
ノ内裡ニ入輿スルナリト云フ。從者極テ夥シ。諸  
候ハ馬ニ跨リ。金装ノ劍ヲ佩フ。手綱ニハ寶石ヲ  
鑄ル。他ハ徒行ナリ。亦美装ナリ。兵士或ハ弓矢ヲ  
携フ。銃手一隊。鎗手一隊ナリ。  
更ニ侍女アリ。從ノ美車ニ駕ス。牛ニテ引ク。或ハ  
馬ヲ以テスルアリ。御者先行シテ牛馬ノ手綱ヲ  
引ク。車ハ兩輪ナリ。輿ハ稀ニハ八角ナル者アレ  
氏多クハ四角ナリ。側ニ級アリ。以テ昇降ニ便ニ



大坂至江戸里程

ス各隅ニ卧龍アリ。外ニ向テ口ヲ開ク。画様精巧  
ナリ。四方ニ錦綉ヲ壅ル。車内四側粉彩ニテ装飾  
ス。巧ナル画像アリ。此一行連續スルヲ殆ント三  
時而後始テ阿蘭使節通行スルヲ得タリ。  
此ノ如クニノ川崎。品川ヲ經テ十二月三十一日。  
大坂江戸ニ着ヒリ。大坂ヨリ大道ヲ陸行シタル  
ナリ。蓋シ大坂ヨリ牧方ニ至ル五里。牧方ヨリ激  
ニ至ル三里。激ヨリ伏水ニ至ル三里。伏水ヨリ京  
都ニ至ル三里。京都ヨリ大津ニ至ル三里。大津ヨ  
リ草津ニ至ル三里。草津ヨリ石部ニ至ル三里。

石部ヨリ水口ニ至ル三里。水口ヨリ土山ニ至  
ル三里。土山ヨリ坂下ニ至ル二里。坂下ヨリ関ニ  
至ル二里。関ヨリ龜山ニ至ル一里。半龜山ヨリ石  
薬師ニ至ル二里。半石薬師ヨリ四日市ニ至ル二  
里。半四日市ヨリ栗名ニ至ル三里。入海ヲ舟行シ  
テ宮ニ至ル。海上七里。宮ヨリ陸行鳴海ニ至ル一  
里。半鳴海ヨリ池鯉鮒ニ至ル二里。半池鯉鮒ヨリ  
同崎ニ至ル三里。同崎ヨリ藤川ニ至ル一里。半藤  
川ヨリ赤坂ニ至ル二里。赤坂ヨリ御油ニ至ル一  
里。半御油ヨリ吉田ニ至ル二里。半吉田ヨリ二川



ニ至ル一里半。二川ヨリ白須賀ニ至ル一里半。白  
須賀ヨリ新居ニ至ル一里。新居ヨリ舞坂ニ至ル  
海上。一里半。舞坂ヨリ濱松ニ至ル三里。濱松ヨリ  
見附ニ至ル三里。見附ヨリ袋井ニ至ル一里半。袋  
井ヨリ掛川ニ至ル二里。掛川ヨリ日坂ニ至ル二  
里。日坂ヨリ金谷ニ至ル二里。金谷ヨリ嶋田ニ至  
ル一里。嶋田ヨリ藤枝ニ至ル二里。藤枝ヨリ岡部  
ニ至ル一里半。岡部ヨリ鞠子ニ至ル二里。鞠子ヨ  
リ駿河ニ至ル一里。駿河ヨリ江尻ニ至ル三里。江  
尻ヨリ興津ニ至ル一里。興津ヨリ申井ニ至ル二

里。由井ヨリ蒲原ニ至ル一里。蒲原ヨリ吉原ニ至  
ル二里半。吉原ヨリ原ニ至ル二里。原ヨリ沼津ニ  
至ル一里半。沼津ヨリ三島ニ至ル一里半。三島ヨ  
リ箱根ニ至ル四里。箱根ヨリ小田原ニ至ル四里。  
小田原ヨリ大磯ニ至ル四里。大磯ヨリ平塚ニ至  
ル二里。平塚ヨリ藤澤ニ至ル三里。藤澤ヨリ戸塚  
ニ至ル二里。戸塚ヨリ程ヶ谷ニ至ル二里。程ヶ谷  
ヨリ神奈川ニ至ル三里。神奈川ヨリ川崎ニ至ル  
三里。川崎ヨリ品川ニ至ル三里。品川ヨリ江戸ニ  
至ル三里。此ノ如キヲ以テ長崎ヨリ江戸ニ至ル



總計三百五十四里ナリ。二十五里ヲ一度トス。概  
言スレハ長崎ヨリ大坂ニ至ル總計二百二十里。  
大坂ヨリ江戸ニ至ル百三十四里ナリ。  
是ニ於テアリニウズ氏及バルトクホルスト氏  
ハ。定例東印土會商ノ在留所ニ直チニ至ラント  
スルモ能ハス。執政筑後殿及町奉行三良丸衛門  
殿ニ参着ヲ達セリ。通過スル所ノ市街ツナクモ  
四里ナリ。人戸稠密。五十四門アリ。夜中之ヲ閉ツ  
〔百八十歩毎ニ一門ヲ設ク〕既ニノ始メテ旅舎ニ  
着セリ。

江戸紀事。

江戸ハ北緯三十五度西經三十八度ナリ。南海ノ  
灣ニアリ。各種ノ洲及砂堆アリ。故ニ小舟ニ非ザ  
レハ着岸スルヲ能ハス。此ノ如ク入海淺ケレハ  
王餘魚鰕鰯鱈殘魚鰻鱺及極テ美味ナル牡蠣ヲ  
産シ。且廉價ナリ。而シテ日用百物備ハラサルナシ。  
家屋稠密。人員衆多ナル所以ナリ。  
〔二〕家屋尋常泥墁シ外ニハ薄板ヲ釘シテ以テ雨ヲ  
防ク。尋常屋脊鱗次同ニ於テ。公候ノ高殿巨屋突  
出ス。各邸ニ大門アリ。中ニ就テ別ニ一大門アリ。  
是開クト一回ノミ。平日之ヲ鎖ス。是將軍ヲ尊敬



スル爲ニ設クル所ナリ。何トナレハ今一候アリ。  
邸宅ヲ建築スルニ方テ。一大門ヲ造リ。板ニテ之  
ヲ密封ス。其門彫刻漆塗ス。敢テ見ルヲ得サテシ  
ム。唯將軍ヲ迎テ饗應スル片ニ之ヲ開ク。ミ平  
時ハ之ヲ被包シテ。鍍金ノ剥脱スルヲ防ク。將軍  
ノ出入ニ此門ヲ通過スルノミ故ニ之ヲ用フル  
ト一回ノミナリ。

江戸ハ關東ニアリ。日本他地ト同シク。護壁ヲ設  
ケス。降佰分割整然ナリ。則チ各町六十間ナリ。其  
長サハ阿蘭ノ二百尺六十間毎ニ一門アリ。夜中

點火シテ。警固ス。此ニ門ノ間ヲ一町トス。番人ア  
リテ能ク注目シ事アレハ之ヲ其長ニ通知ス。此  
間數ハ壘ニ町ノミニ用フルニアラス。更ニ村落  
ニモ田畝ニモ用フルナリ。  
凡ソ人民都鄙共ニ稅ヲ免ス。唯地稅ヲ重課スル  
ナリ。家屋多クハ木造ナリ。故ニ江戸及他地ニ火  
災多シ。延焼或ハ全部ニ亘ルヲアリ。然レモ尚新  
築スル所木造ナリ。但シ各街ニ避災倉庫アリ。火  
災アルニ方テ貴重品ヲ貯。下層ニハ家人住シ。  
上層ニハ雜具ヲ置ク。



海路ヨリ江ノ入ルニ左側ニ高繩山アリ其巔  
ニ樹木繁茂シ天ヲ衝ク兩峰相款ワノ間ヨリ瀑  
布アリ急瀉ス水橋下ヲ過キ人家ニ浴テ海ニ入  
ル此一峰上ニ將軍ノ偃息所アリ山麓ニ美麗ナ  
ル殿堂アリ將軍ノ寄附スル所ナリ故ニ將軍及  
其近親血族及僧官ノ長ノ外他人ヲ之ニ入ルヲ  
許サス

トシクワルバ村ハ山後右側ニアリ樹木美觀ナリ  
致歩ヲ隔テ東方ニアルギラム村アリ高杉樹下  
ニアリ城郭ニハ各所ニ櫓アリ樹間ニ隱見ス高

繩トトシクワルバトノ間ニトシカウ川アリ江戸  
ヲ通シテ海ニ入ル九曲ノ川ニ架スル重大石橋  
アリ此橋側河岸ニ森林ノ監主チーロドノ宅  
アリ

稍上邊ニ第二橋アリ此川右側トシコウヤマ村  
ニ注クトシコウヤマニ斜ニ對シテ水路運上役  
所アリ四角ニシテ高く雲ニ聳ユ稍西方ニ港奉  
行ノ居アリ階圓ナリ前面ニ四角ノ櫓アリ

三進テ町ニ入りトシカウ川ニ近接シテ遠見櫓ア  
リ高キ一六十二間一八六尺五寸ナリ常ニ番



兵千二百人ヲ置ク。  
其側東方ニ一ノ堅固ナル警固邸アリ。西方ニ列  
戸寺院ノ堂宇アリ。或ハ佛ヲ奉シ。或ハ神ヲ奉シ。  
或ハ魔ヲ奉ス。遙カニ市中ヲ隔僊息所アリ。屋脊  
高ク聳ニ。往時將軍東照宮様ノ建築セシ所ナリ。  
江戸城ノ西ニ豊後公ノ邸アリ。之ニ接シテ將軍  
ノ園圃アリ。其結構ナルヲ世界セ奇觀ノ一ナル  
セミラミス。王宮モ遙カニ及ハサル所ナリ。天工  
人工相競テ其巧ヲ極ム。  
次テ四國及平戸候ノ邸アリ。執政豊後ノグニコ

ノホネニ伊賀カムバリニ記伊及對馬共ニ守ヲ  
附ス。美宅ニ住ス。  
稍隔テ美宅アリ。大城守護役ナルユトランドノ  
住ス。南方高所ニ釋迦堂アリ。陸路運上所ニ近接  
ス。同高地西方ニ各様ノ美宅アリ。諸有司ノ居ナ  
リ。稍下テ壁アル邸アリ。騎兵二千ヲ置ク。三體佛  
ヲ奉スルノ殿堂アリ。三層高ク雲ヲ衝ク。將軍信  
長三十候ヲ膝下ニ踏ミ自ラ王冠ヲ戴キ。此殿堂  
ノ為ニ財ヲ惜マズ。以テ名ヲ不朽ニ画メントセ  
シ所ナリ。此佛ハ日本諸佛ニ勝レリトシタルニ



千五百八十二年。明智ノ為ニ元ヲ失フヨリ。此法  
天正十年。此殿堂ヲ三體ニ附セリ。

之ヲ距ルテ遠カラスノ江戸南部ノ奉行邸アリ。  
邸ハ細長クシテ四方鈍ナル櫓アリ。更ニ市中深所  
ニ一向宗ノ寺院ニ所アリ。稍相同シ。共ニ小像ヲ  
羅列ス。又驅魔師ニ属セルニ寺アリ。此内ニ唯魔  
像ヲ安スルノミ。他物ヲ見ス。

此他江戸ニハ各種ノ堂宇アリテ。高山ノ後ニ見  
ル。其建築ハ皆步卒三千五百人ヲ養フ。其側ニ江  
戸南部ヲ主宰スル人ノ邸アリ。凡ソ之ニ属スル

諸士ハ百般ノ事件ヲ聞知スルナリ。

遠見櫓アリ。市中及近傍諸地ヲモ眺望スヘシ。地  
形殆ント三角ナリ。兵卒及長官ノ邸アリ。重層櫓  
アリ。北方ニ僧官ノ宮殿アリ。四高僧之ニ任ス。殿  
堂三アリ。一列ニ併フ。

更ニ奇麗ナル堂宇アリ。或ハ神ヲ奉シ。或ハ佛ヲ  
奉ス。抑モ神ト云ヒ。佛ト称スルモ。一ノ固有名ニ  
アラズ。蓋シ日本人ハ。未来ノ幸福ヲ祈ルヘキヲ  
佛ト称シ。又現在ノ諸願。例之佳子ヲ奉ケ。財寶ヲ  
積ミ。威權ヲ握リ。健康ヲ保ツ等ハ。皆神ニ乞フ一



シトス。

此ノ如キ尊称ヲ得ルハ古來皇子皇妃及皇帝ノ  
曾テ其生時ニ於テ大名ヲ與スノ事業アリシ者  
ナリ。其偉勳盛業猶希臘及羅旬詩人ノサキユルニ  
ス。ジユビテルバキユスマルスヘルキユレス。諸  
神ノ功績ヲ賞讃スルカ如シ。

三將軍ノ偃息所ノ一側ニ貴妃ノ宮殿アリ。三十殿  
ニ過ク日本人之ヲカナラント名ク。海ニ向テ筑  
前候及伊達候ノ美邸アリ。又薩摩候ノ邸アリ。大  
ニ筑前候ニ似タリ。唯門高ク櫓ノ如キヲ以テ異

ナリトス。

更ニ内部ニ他ノ建築アリ。三高櫓アリ。屋脊最モ  
聳ユ。是貴妃ノ居ナリ。日本ニテハ御臺ト称ス。又  
肥前候ノ邸モ美ナリ。貴妃ノ居ニ接シテ。避火ノ  
倉庫アリ。日本將軍ノ財寶ヲ藏ス。金銀鼻ス可ラ  
ス。サントマルキユスノ富モ。ボトシノ鑛坑モ。  
歐羅巴諸王ノ歲入モ比スヘキ者アラス。貯畜ノ  
盛ナルヲ知ルヘシ。  
貴妃ノ第ハイグレロダノカムマゴシハヤノ  
アイステロコ王ナリ。其隔ニ一大邸アリ。又伯父ノ



王宮アリ。其第一ハ尾張候ナリ。第二ハ水戸候弟  
三八紀伊候ナリ。皆將軍様。又公方様ト云フノ弟  
ナリ。相距ルノ遠カラス。紀伊候ノ宮ヲ最モ盛大  
ナリトス。ニ層屋脊ナリ。將軍様ハ内府様ノ子ニ  
シ。父ノ後ヲ継クハ千六百十六年ニアリ。  
又アマングシ候ノ二弟ノ美郎アリ。稍其上ニ博  
多候ノ郎アリ。將軍ノ母ノ父ナリ。更ニ讃岐タシ  
ガ及大村候ノ郎アリ。又天草五候ノ郎アリ。有馬  
候ノ美郎アリ。又將軍第一女ノ二郎アリ。壯觀ナ  
リ。北方ニ觀火槽アリ。高サ九十三間。一間ハ六尺

五寸ナリ。上ニ説クカ如シ。稍其下ニ日本寡婦ノ  
寺院アリ。此寺ニハ江戸ノ東部ヲ主宰スル人ノ  
居近接ス。之ヲ距ルノ六町ニ一寺アリ。四頭ノ  
佛ヲ安ス。

此方角ノ人家中ニ一寺兀立スルアリ。其廣大美  
麗大ニ驚クヘシ。此塚ニ於テ將軍ノ第二子。第三  
子。諸學ヲ講習スル所ナリ。江戸ノ東端ニ二大寺  
アリ。共ニ阿彌陀ヲ安ス。然レ凡之ヲ區別スルニ  
一ハ唯草ニ阿彌陀ト稱シ。一ハ金ノ阿彌陀ト稱  
ス。此町ノ末端トシクワルバ村ニ結構ナル建築



アリ。江戸東部ノ運上役所ナリ。

④江戸ニテハ金ノ阿彌陀ノ寺ヲ最モ有名トス。其佛體驚クヘシ。寺内高卓上ニ安置ス。此卓ハ厚ク銀板ニテ包ム。此板ニ金片アリ。佛像ノ前後ニ低ル。阿彌陀ハ馬ニ乘ル。馬ハ六箇ノ首ヲ列ス。一首毎ニ千年ヲ標ス。阿彌陀ハ馬ニ跨ル。其頭犬首ニ似タリ。耳ヲ敷ツ。両手ニ金ノ蓮ヲ持テ。且ツ口ニ啣ム。然レモ其高價ナル。ハ阿彌陀ノ臍ヨリ壅ル。足ニ至リ。又腹ヨリ壅テ馬ニ至ル。ノ被ニ及ハス。何トナレハ其被ハ純金ニシテ。眞珠。及金剛石ヲ

夥シク籍スレハナリ。卓ノ下ニ日本字ヲ以テ佛教ノ諭語ヲ記ス。是日本佛ノ最貴ナル者トス。日本ノ自家ノ幸福ヲ祈ルニ。阿彌陀ノ名ヲ唱ル。ハ頻回ナル。抑モ何ノ意ナルヤ。悟ル可ラズ。耶蘇教徒口デウエーキヲロイウス。其書中ニ記スル。ハアリ。是日本島カシガニ在テ。千九百六十五年ニ記ス所ナリ。曰ク公方ノ妃。其宮中ニ於テ阿彌陀ヲ奉スル。一持佛堂ヲ築ケリ。常ニ侍婦ニ回繞セラレテ。阿彌陀ヲ禮敬ス。其像美少年ニ似タリ。頭ニ高價ノ金冠ヲ戴キ。頭ノ周圍ヨリ金光ヲ



放ッ。公方ノ亂妨人。ジアンドノ。及三好殿ノ爲ニ  
襲ハレ。逃亡セシ片。其妃モ二三婦ヲ伴フテ。京都  
ヲ距ル。千五百歩ノ寺ニ隱ル。然レ氏偵知セラ  
レテ。ジアンドノ。及三好殿ノ命ニテ刎頸セラル  
ニ及ヘリ。此時檢視者ニ請テ。紙筆ヲ求メ。書ヲ二  
女子ニ寄ス。是亦敵手ニ属シ。近傍ノ屋ニ在ル所  
ナリ。其書ニ曰ク。妾不理ニシテ刎頸セラル。然レ  
氏泰然トシ死ニ就クナリ。阿彌陀ハ無限ノ智識  
アレハ。必ラズ此不幸ヲ察スヘク。又導テ極樂土  
ニ至ラシメ。永久公方ニ近接スルヲ得ヘカラシ

二五〇へキヲ固信スト。記シ終テ之ヲ封シ。僧ニ向テ  
滞留中ノ厚意ヲ謝シ。阿彌陀ヲ禮拜シ。手ヲ天ニ  
攀ケ。二回阿彌陀ヲ呼テ告別シ。僧官長ヲシテ頭  
髮ヲ剃除セシム。是世念消滅ヲ標スルナリ。再ヒ  
室ニ入り。又手ヲ攀テ。阿彌陀ヲ呼フ。二回。乃チ  
刎卒ヲシテ頭ヲ刎セシム。  
更ニ記スヘキヲアリ。阿彌陀ノ像ハ極テ敦様アリ。  
或ハ五頭ノ馬ニ騎ル所ノ犬首ナルアリ。或ハ  
少年ノ如キアリ。又裸體ニシテ耳ヲ穿テ。彫刻シタ  
ル立派ナル蓮華上ニ卧スアリ。又異形ノ他佛共



ニ併列スルアリ。前頭ニ被リ物ヲ彫ル。頂上ニ相  
重疊セル結締アリ。頭ハ親愛スヘキ少年ニ似タ  
リ。耳ニ二環ヲ掛ク。一環ハ他環ヲ通ス。頭圓ニ袈  
裟ヲ掛ク。胸前ニ珠ヲ為ス。胸ニハ長ク細キ板ニ  
テ被リ。鱗肩状ナリ。肩及脊ニハ羽毛ノ衣ヲ着ク。  
精巧ニ相列次ス。手ニ貫珠ヲ執ル。羅瑪教徒ノ讀  
經ニ供スル者ニ異ナラス。胸腹非常ニ肥大ナリ。  
半腹ニノ二箇ノ大枕ニ終ル。其前面四角ナル石  
ニ日本字ヲ彫ル。河彌陀ト共ニ一ノ三頭佛ヲ置  
ク。アリ。一片ノ被リ物ヲ戴ク。後頭ハ相接着ス。

河彌陀  
金河彌陀

額ニ髻アリ。頸圓ニ襟ヲ掛ク。カイルテ樹ノ名。葉  
ヨリ重疊スルカ如シ。又両側ニ四臂。四手アリ。胸  
及腹ノ上邊ニ五條ノ貫珠ヲ纏フ。又腹ニ代フルニ  
下體ニ膨脹セル大陽ヲ以テシ。中間ニ異形ノ像  
ヲ現シ。周圍光線放射シテ。漸次ニ微弱トナルア  
リ。壁ニハ高價ナル日本衣ヲ掛ク。而シテ彫ク。燈燭  
ヲ點ス。  
此草ニ河彌陀ト稱スルト。金ノ河彌陀ト稱スル  
有名ナルニ寺ノ外都テ距ル。一四千歩ニシテ。一寺  
アリ。舊將軍ノ築ク所ニシテ。今尚之ヲ修理スルア



リ其寺長サ百四十尺。中間非常大ノ楹戸ニ枚アリ。之ニ入レハ大卓アリ。内一圖ヲ画ク。恐ルヘキ異人ノ如シ。耳穿チ。頭禿シ。額髭ナシ。印土バルノ木ノ容姿ニ似タル者坐ス。像上ニ各様ノ帷ヲ墜ル。兩側ニ軍装セル兵卒銃ヲ持チタルアリ。飛躍セル黒牛アリ。老幼術者アリ。又大ニ恐ルヘキ魔アリ。又旋風。晦雲中。雷電ノ状アリ。堂内七層階アリ。兩側ニ十像列立ス。左側ニ五百。右側ニ五百ナリ。皆阿彌陀ノ徒ナル羅漢ニ擬ス。各像面容喜色アリ。三十臂。三十手アリ。而シテ其二ハ適宜大ナレ

氏他ノ臂手ハ極テ小ナリ。又ニハ腰ニアリ。每手ニ矢ヲ持ツ。其胸ニ七個ノ小人面ヲ刻ス。各金冠ヲ戴ク。前頭及後頭ニ彫シク金剛石ヲ繫ク。更ニ鑽鈴。及鐘アリ。又無數ノ像アリ。皆純金ニテ製ス。精巧ヲ極ム。觀音堂内金光目ヲ眩ス。

○天 故ニ日本人諸國ヨリ群集シテ之ヲ拝スルナリ。加之更ニ此周圍ニ他ノ寺院アリ。就中觀音堂ヲ距ルハ半里ニシテ。立派ナル大學校アリ。此大學校ハ丘ノ麓ニアリ。數字ニ分ツ。周圍ニ小川アリ。更ニ各種ノ寺院アリ。其寺ニ於テハ日本人魔像



ヲ拜ス。其画像異様驚怪スヘシ。丘頂ニ三大堂アリ。其柱ノ大ナルト怪シムヘシ。地上ニ磨キタル瓦ヲ敷ク。其一堂内ニ釋迦ノ一大像アリ。釋迦ノ兩側ニ小像アリ。背後ニ一木葉ヲ立ワ之ニ二十ノ卵形アリ。現出ス。其大サ掌ノ如シ。又ニ歳児ノ像四十アリ。堂側ノ兩壁ニ二個ノ魔アリ。異容ノ捧ヲ持ツ。此諸像及卵形皆厚ク鍍金ス。第二堂ニテハ學事脩業スルノ大學校ノ規則ノ如ク。漸ク進テ最上級ニ至ルヘシ。茲ニ教椅子アリ。上ヨリ長帷ヲ墜ル上級ノ椅子ニハ師僧坐シ。

下級ニハ生徒居ル。以テ學事ヲ講究ス。此堂龍ニ寄贈スル所ナリ。蓋シ龍ハ學者ノ守護神ナリト信スレハナリ。然レモ龍ノ像ヲ安スルナク。又他神ニ於ケル如ク供物ヲ捧クルニアラス。但シ天井ニハ蜿蜒セル像ヲ固着ス。生徒龍ヲ信心スレハ其視力及精神天ニ昇ルヘシトス。第三堂ハ他ノ二堂ニ比スレハ廣高大ナリ。茲ニハ生徒ノ學事ヲ脩ムルノ肖像各様ノ画ヲ掲ク。堂ノ中間ニ一大書櫃ヲ置ク。全彩ヲ飾ル。無致ノ書籍アリ之ヲ通覽スルニハ幾百年ヲ費スヘシ。



書櫃ニハ摺軸ヲ具ス。故ニ之ヲ出入スルニ便ニ  
ノ。隨意ニ更換スヘシ。  
日本寺院ノ廣大ナルヲ。又結構ナルヲ。驚駭スル  
ニ堪タリ。大室ニハ二十僧ヲ容ル。稍小ナルハ十  
五人。或ハ十六人ヲ容ル。最モ小ナルハ二人ヲ容  
ル。又此寺院ヲ酒宴ニ供スルヲアリ。園中多ク樹  
木ヲ植テ。其觀ヲ美ニス。衆人群集シテ。恣ニ飲食  
シ。歡樂ヲ取ルニ適ヒシム。加之放肆ノ極。或ハ妓  
ヲ携フルモ許ス所トナル。  
ヘレリキハゲナール氏曰ク。余大阪市外ニ於テ

六寺ヲ見タリ。戸内ニ水像アリ。坐スアリ。立ツア  
リ。共ニ眞大ニ擬ス。或ハ其前ニ小箱ヲ置ク。日本  
人ニ銅貨ヲ投シテ。釋迦ノ名ヲ唱フ。又一殿堂  
アリ。其中間ニ一急流小川アリ。貧婦ハ字ヲ書ス  
ル小紙ヲ此流ニ投ス。蓋シ祈ル所アルナリ。

凡ソ日本寺院ノ建築極テ立派ナリ。口デウエーキ  
アルノイダ。奈良興福寺ノ狀ヲ記スルヲ。極テ詳  
ナリ。此寺ニハ三门アリ。各門内ニ廣潤ノ地アリ。  
周田ニ廊下アリ。大柱ヲ建ツ。第一ノ入口ニ二級  
ノ廣キ石階アリ。上階ニ登レハ非常ノ二大像ヲ

奈良興福寺。



リ。鑄造極テ精巧ナリ。共ニ手ニ鍵ヲ執ル。蓋シ寺  
院ヲ守護スルノ意ヲ表スルナリ。第三門内ニ一  
堂アリ。亦石階アリ。非常ニ結構ナリ。堂ノ重扉共  
ニ二扇アリ。彫刻極テ精緻ナリ。殿堂ノ中間ニ三  
像アリ。共ニナル。一フーテン半ノ高サナリ。釋迦  
及其徒アリ。左右ニ立ツ。床ハ四角ナル大理石ヲ  
敷ク。

③最モ非常ニ驚クヘキハ七十本ノ杉柱ナリ。其鉋  
琢積ニノ。高ク正立スル。一或尺ナルヲ知ラス之  
ヲ寺院ノ計畧帳ニ徴スルニ一柱毎ニ五萬ジユカ

一テンヲ費ヤスト。周囲ノ壁ニハ千體萬狀ノ彫刻  
アリテ大ニ觀テ粧飾ス。屋脊ハ石灰製ノ瓦ニテ  
葺ク。而シテ此石灰ハ交ユルニ沙ヲ以テセシテ  
搗キ研キタル紙ヲ以テス。瓦ノ厚サニ指許ナリ。  
黒色科ヲ塗ル。画様ノ精緻ナルヲ熟視スル人ヲ  
驚カス。

此屋脊ハ五百年ヲ經ルモ微損スル。ナシ。且極  
テ重ケレド。壁外ニ延フル。一四尺。而シテ屋脊ト壁  
トノ間ニ支柱スル者アル。ナシ。此ノ如キ重量  
ヲ支柱スル者ナクノ保持スルノ妙工ハ歐羅巴



工人ノ企テ及ハサレ所ナリ。

寺堂ノ側ニ坊主ノ食堂アリ。頗ル大ナリ。其構造  
廣大堅固ナル。本堂ニ讓ラス。長サ四十尺。幅ニ  
十尺ナリ。臥房ハ分テ二列ト為ス。百八十房アリ。  
其外ニ極テ廣大ナル客殿アリ。其一ハ雲中ニ聳  
ユ。杉柱二十四本アリ。前ニ書庫アリ。多ク日本書  
籍ヲ貯ス。

更ニ浴室及百物ヲ藏スル倉庫アリ。庖厨ノ清潔  
ナル。一記ス所ヲ知ラス。鍋ハ精銅ニテ製ス。高サ  
一尺。圓形三尺。厚サ二指。庖厨ニ浴テ小流アリ。室

内終夜燈ヲ點ス。其數二十四アリ。前ニ池アリ。各  
種ノ魚ヲ飼フ。此魚ヲ盜ム者ハ死刑ニ處ス。此興  
福寺ハ建築以來今既ニ七百年ヲ經ルト云フ。日  
本ニハ尚別ニ此ノ如キ寺アリ。釋迦ノ像ヲ大ニ  
奉尊スルナリ。本同様ノ寡婦ノ染ク所ナリ。全軀  
鑄造ナリ。外部鍍金ス。釋迦ノ頭ハ五十歳男ノ狀  
ナリ。額及頬ニ髭アリ。疎生ス。頭髮ハ短截ス。被フ  
リ物ハ袈裟ナリ。頸圍ニ金ノ貫珠アリ。寶石ヲ交  
ユ。之ヲ繫クニ金銀線ニテ織タル紐ヲ以テス。手  
ヲ登テ前ニ向ケ。祈念スルノ狀ヲ為ス。指ハ少シ



釋迦。

ク相用ク。紐ニテ臂ヲ纏フ。而シテ臂紐ニハ長キ總  
ヲ低ル。釋迦ハ結跏シ。大ナル金盤上ニアリ。其膝  
及脊後ニ二個ノ非常ナル供物盤アリ。金盤ノ上  
邊ハ四角ナリ。其外面上縁ニ十二ノ香爐。六ノ金  
罐アリ。金爐ハ晝夜香火炷ク。是ニハ各種ノ香料  
ヲ供ス。袈裟ハ四角ニノ提出セル足ニ掛リ。周圍  
ニハ日本人ノ譬諭ノ語ヲ記ス。  
抑モ釋迦ハ底意地惡キ詐欺者ナリ。曾テ日輪ヲ  
觀察スルヲアリ。往昔ノベタゴラスノ學派ヲ信  
シ。殊ニ魂魄不死ニシテ身體ヲ離ル。片ハ万物ニ轉

移スルノ説ヲ唱フ。

六 此教ノ蔓延セス。又永久存セサルノ理ハ怪シム  
ニ足ラス。羅甸人及希臘人ハ。此魂魄轉移ヲ固信  
セリ。希臘人常ニ唱フル所ノ説アリ。ブラトノ証  
スル所ニテハ。オアルベウス氏ハ。鵠ナリ。タノトラ  
ス氏ハ。鶴ナリ。アヤキス氏ハ。獅子ナリ。アガノム  
ノシ氏ハ。鷹ナリト。又アムプロシウス氏ノ説ニ  
テハ。希臘ノ釋教派ニテハ。世界萬物ノ魂魄ハ。蜂  
或ハ。鶯ニ轉移スルヲ信ス。聽衆ヲシテ喜テ賢コ  
キ語ヲ領知セシ。ノシカ。鳥ニ唱歌ヲ以テ耳ヲ慰



ノリ。然レ正偽言者ノ魂魄ハ蛇ニ入り。盜賊ノ魂  
魄ハ狼ニ入り。詐欺者ノ魂魄ハ狐ニ入ル等。總テ  
類似ノ獸ニ入ルトス。ベタゴラス氏及プラト氏  
ハ。ヘロドテウス氏ノ証スルカ如ク。此説ヲ陀日土  
人ヨリ取ル所ナリ。ガモルキス氏ハ之ヲノール  
デルゴイテニ弘ム。故ニ之ヲ奉ミテ佛トスル  
所ナリ。デドロイテス氏之ヲ佛朗西及獨逸地方  
ニ於テ廣布セリ。西印土人之ヲ信スル。何ニ由  
ルヤ。沃土ノバリセーシモ。此誤説ヲ取ラスヨセ  
ヒエス氏ニ據レハ亡帝ウリアニユス。ハ。歷山王ノ夢

身セルナリ。是大難ヲ恐レサル所以ナリト。余此  
魂魄轉移ノ説ヲ証スルニ。羅甸ノ二詩人ヲ以ス  
ヘシ。オロジウス及チビエリユスナリ。今之ヲ譯ス  
レハ。

魂魄ハ不死ナリ。離去スルナリ。永久新居ヲ求  
ム。其地ヲ愛ス。正甚ク遠隔ニ至ラス。定居ニ  
送リ。彼ニ往キ復タ此ニ歸ル。既ニ體ニ入り。而  
ノ進歩ス。野獸ヨリ人身ニ入り。或ハ人身ヨリ  
獸身ニ入ル。而ノ永久不死ナリ。

右オロジウス氏ノ詩語ノ意ナリ。チビエリユス氏



ノ詩ニ曰ク

元

墓ハ骨ヲ蓋フヘシ。永久ノ生命ヲ頭上ニ保持ス。假令變化スルモ尚生ヲ存ス。或ハ馬トナリテ野ニ草ヲ食ヒ。或ハ牛トナリテ厩ニ立ツ。或ハ氣中ニ在テ翱翔ス。

此日本ノ釋迦ハアタナンウスキリセリユスニ據レハ。印土人ハラマト称シ。チユネキネセルハシヤガト称シ。支那人ハセロキヤント称ス。支那人ハ釋迦ノ誕生ノ地ナリ。印土地方チンチユルノグノクト名ク。又日本人ノ釋迦ヲ説クニ曰ク。其母

夢ニ白象ノ先ツ口ヨリ入り。復夕左脇ヨリ出ルヲ見ルト。

印土人。殊ニ支那。タイ。チユンシン。暹羅。及ヒ皮求ニ於テハ。白象ヲ貴重スルハ。之カ為ナリ。之ヲ王ナリトシテ尊敬スルナリ。之ヲ飼養スルニ盛膳ニ非サレハ。供セス。王公貴人モ大ニ尊敬シテ象ヲ拜ス。加之此白象ヨリシテ。元龜四年。千五百七十六年ニ暹羅ト皮求トノ間ニ戦争ヲ起セリ。此戦争ニテハ暹羅ニテ損害ヲ蒙ルリ。則チ白象ノ過クル所ノ地稅ヲ皮求ニ納レリ。然レモ此雜談ハ嗣王之



ヲ守ラス。却テ昔日之ヲ失シテ暹羅王ノ大ニ心  
痛スル所ノニ白象ヲ取戻セリ。蓋シ此ノ如キ獸  
ハ天ノ賜ヲ所ナリトシテ非常ニ蒙答トスルナリ。  
釋迦ハ其信心者ノ意ヲ試ムル第一策ハ母殺シ  
ナリ。其降誕スル片右手天ヲ指シ左手地ヲ示シ  
屢唱テ曰ク天上地下唯我獨尊ト。後身ヲ深山ニ  
隱シ書ヲ著ハセリ。支那人ノ説ニ據レハ徒弟八  
萬人ヲ教化ス而ノ其中先ツ五百人ヲ拔擢シ此  
五百人中更ニ百人ヲ撰ヒ又百人中十人ヲ撰ヒ  
新教ノ秘奧ヲ傳ヘリ。又其終焉ニ臨テ此十人ノ

手中ニ諸種ノ書ヲ與ヘ尚深山ニ在テ之ヲ講習  
セシム。且人ヲシテ疑フ勿ラシメシカ為ニ之  
ニ記証スルヲ左ノ如シ。釋迦其信ナルヲ保證ス  
ト

魂魄轉移。

釋迦又曰ク魂魄ハ轉移スルヲ八萬回彼此ノ體  
ニ入ル而ノ耻辱ヲ蒙ムルヲ六回。始テ罪障ヲ消  
滅スルニ足ルト最後ニ白象ニ入り印土人之ヲ  
口ハンフリーラーニセスト稱ス。不憂ノ幸福ヲ受  
ク。然レ此斯ノ如キニ至ルノ前ニ於テ或ハ鳥ト  
共ニ飛ビ牛ト共ニ叫ビ魚ト共ニ泳キ蛇ト共ニ



這ハ木ト共ニ發育スルナリ。  
此ノ如キ説ヲ耶蘇教徒一ルミアス氏嘲笑シテ  
曰ク。余我カ身ヲ顧ミシハ。我身ヲ驚怪ス。之ヲ何  
ト名クヘキヤヲ知ラス。或ハ人ナルヤ。或ハ犬ナ  
ルヤ。或ハ狼ナルヤ。或ハ牛ナルヤ。或ハ鳥ナルヤ。  
或ハ蛇ナルヤ。或ハ龍ナルヤ。我能ク此諸體ニ變  
スレハナリ。凡ソ地上ニアリ。或ハ氣中ニ生活ス  
ヘク。又水中ニ存生スヘシ。或ハ野獸トナリ。或ハ  
銅獸トナリ。或ハ無聲物トナリ。又發聲物トナリ。  
或ハ事理ヲ辨スル物トナリ。又辨セサル者トナ

リ。或ハ浮泳シ。或ハ飛揚シ。或ハ氣中ニ飛ヒ。或ハ  
地上ニ這フ。或ハ歩行シ。或ハ靜坐シ。或ハ植物ト  
ナリ。樹木ト為ルト。

三釋迦ヲ奉スルノ日本人。及支那人ハ。自ラ謂ク。魂

魄樹木。或ハ植物ニ轉移ストヒリ。ガスマリミユス  
氏日本紀行中ニ記ス曰ク。交趾ニ於テ千六百三  
十二年一樹アリ。高サ百二十尺。木サ之ニ適フ。寛永九年颶  
風ノ為ニ倒ル。百人夫ノ力ヲ以テスルモ之ヲ移  
スヲ得ス。是ニ於テ驅魔師ニ就テ。其動カサル所  
以ヲ詰問ス。是釋教派ノ虚言ナルヤ。驅魔師ノ妄



語ナルヤニ因セス。日本及支那ニテ信スル所ニ  
テハ其樹人語ヲ為シテ答テ曰ク余ハ支那ノ一  
武士ナリ。余カ魂魄百年間各種ノ物體ヲ經歷ス  
ルノ後此樹ニ轉移ス。蓋シ國內騷亂戦争アルヲ  
避クルカ為ナリト。乃チ此虚言ヲ信シテ。此非常  
大ノ樹根ニ一盃ノ米ヲ供シ。樹中ニ寓スルノ武  
士ノ靈ヲ永ク餓ユルヲ勿ラシメントス。但シ此  
ノ如キヲ獸類ニモ為ス。アリ。  
カムサナ<sup>ボル</sup>ラ<sup>ン</sup>ジユスヲ信スレハノ中ニ一寺  
アリ。坊主住ス。寺ノ側ニ阜アリ。樹木ヲ多植ス。日

々一僧各種ノ食物ヲ盛タルニ盃ヲ捧ク。其戸ニ  
近クニ方テ鈴ヲ鳴ラス。此音ヲ聞テ猫。犬。山羊。猿  
猴。豚。蛇。及百般ノ獸類其數三千群集ス。則チ之ニ  
食物ヲ頒チ與フ。此供膳終ル後坊主復テ鈴ヲ鳴  
ラス。獸類ハ之ヲ食スルノ後各々其巢窟ニ歸ル  
以テ例トス。以為ク此内必ラス往時ノ英雄ノ靈  
寄寓スル者アリテ禍福前日ニ異ナル者アルニ  
シト。  
此等ノ説ハ。既日土人ニ起ル所タルヲ疑ナシ。而  
ノ既日土人ハ。ブラト。及ベタ。ダラスノ希臘。及羅



天堂地獄

旬ニ弘法セシニ由ル。加之此教ハ各方ニ蔓延シ。北ハゲイラン。西ハ獨ヒ。及ガルロイセン。東ハ印土更ニ進テ支那。及日本ニ及ヘリ。日本人ハ印土人ヨリ學フ所ナルハ疑ナキナリ。印土人曰ク。或人ハ其惡業ノ為ニ魔ニ愛シ。氣中ニ浮泳シ。罪障ノ多クニ應シテ苦役セラルニ長短アリ。此魔ハ餓餓耐可ラス。僅クノ蔬菜ヲモ食スルヲ得ス。唯慈善者ノ貧民ニ共フル所ノ物ノミヲ食シ得ヘシ。故ニ死者ノ朋友ハ九日間斑毛鴉ニ食物ヲ施共スルナリ。斑毛鴉ヲ飽滿セシム

レハ。隨テ魔ノ靈ヲモ慰ムルニ足ルナリ。此ノ如キ魔ハ人身ヲ現スルナリ。然レモ他人ニ向テ妨害スルナキカ故ニ恐ルヘキニアラス。印土人又曰ク。靈魂罪障消滅スルノ後地獄ナムマロコント称ス。ヲ脱シ再ヒ世上ニ出テ彼此ノ體ニ入ルヲ得ルナリ。然レモ其地獄ニ在ルヤ暗室アンタムタツヘスニ住シ。鐵席ニ坐シ。鐵嘴ノ鴉獐惡ノ犬屠ヲ刺スノ蚊アリ。困苦耐可ラス。少休歇ナシ。其苦責永久連カス。其安全ナル中ノ處置ニ二法アリ。或ハシユルガ



ルニ轉移セラル。茲ニハ苦責セス。故ニ死スルノ  
ミ苛責スヘキノ罪障ナキナリ。然レトテウエタ  
エス。死シテシユルガムニ到ル者ヲテウエタエス  
ト名クハ。滯留ノ未魂魄及身體シユルガムヨリ  
出ルヲ得ルナリ。此ノ如クニ再生スルハ。印  
土人。其身如何ナルヤヲ詳カニセス。唯確証シテ  
曰ク。或ハ世ニ出テ再生シ幸福ヲ得。但シ美婦ト  
ナルモ子ヲ攀クルヲナシ。然レト此規則ハ必ラ  
スシモ一般普通ニアラス。或ハ某ノテウエタエス  
ハシユルガムニ留止シ。茲ニテ子ヲ生ス。此ノ如

キ者。其數。天ノ恒星。及遊星中ニ存ス。抑モ此說ハ  
舊時ノ望遠鏡學者ノ說ニ根ス。蓋シ或ハ新星ノ  
生スルアルヲ以テ云フナリ。

三

然レト能ク教法ヲ固信シ。微罪ナキ者ハウエイコ  
ンタムニ轉移ス。茲ニハ諸佛ノ群居スル所ナリ。但  
シ第二回ノウエイコンタムナリ。單ニ斯ク言ヒ。又リ  
アウエイコンタムト稱ス。即チ歡樂ノ天トノ意ナリ。  
初回ヨリシテ誰人モ此地位ニ至ルヲ得サル  
ナリ。第二說ハ印土人。大ニ爭論スル所ナリ。人或  
ハ魂魄ノリアウエイコンタムヨリ轉移スルヲ駁撃



印土人夫死スルハ其妻共ニ燔死ス

シ。或ハ之ヲ排毀ス。又日本人皆盡ク釋迦ヲ信スルニアラス。殊ニ法華宗ニテハ内心ニ或ハ公然トシテ魂魄轉移セズ。消滅ストスルナリ。故ニ此法華宗ニテハ釋迦ヲ唱ヘス。經名ヲ稱スルナリ。成佛ヲ得ルニハ信心シテ上ニ記スルカ如ク南無妙法蓮華經ノ語ヲ連唱スルヲ以テ足レリトス。而シテ印土ニ出ルノ原意ヲ悟ラサルナリ。印土ニテハ妻ハ夫ト共ニ燔死ス。蓋シ釋迦ヲ信心スルナリ。印土ニテハ釋迦ヲラマト稱ス。抑モ

ブラミネ  
ウエンシアース  
セツレアース  
ソウドラーヌ

同物ナリ。其燔死スルノ状左ノ如シ。其婦曾テ夫ニ誓テ同穴ヲ約スル中ハ決シテ之ヲ破ラズ。夫屍ヲ燒クノ同日ニ炭ノ火トナル時ニ直チニ身ヲ燒キ棄ルナリ。ブラミネ及ウエンシアースハ之ヲ固執ス。然レモセツラレマス。及ソウドラーヌハ別ニ習慣アリ。則チ夫他所ニ在テ死シ。或ハ既ニ早ク死シタル報告書ヲ手ニ握ルヤ其婦直チニ火ニ入ルナリ。市外ニ於テ一大坑ヲ掘リ。火ヲ燒テ屍体ノ紫色トナルヲ候テ而シテ婦ハ室ニ在リ。椅子ニ凭リ美飭ス。若シ其人セツトラ。或ハソ



ウトラ派ナル時ハ。一午ニ擲據ヲ執リ。一午ニ鏡  
ヲ持テ連々ナライナ。或ハラマノ名ヲ唱テ而シ  
或ハ少許ノ牛酪。少許ノ蔬菜ヲ食ス。其中精神ヲ  
昏迷スル品ヲ混スルナリ。是其婦人ノ苦痛ヲ叫  
喚スル。一少ナカラシムル為ナリ。然レ其婦人  
ヲミセス派ナルカ。或ハウエインシアス族ニ属スル  
片ハ紅色ノ花ヲ握リ。先ッ佛ヲ祈リ。其像ヲ胸ニ  
掛テ。朋友ニ告別スル後。歩ヲ戶外ニ進メ。或ハ美  
麗ナル衆物ニテ荷ハル。満顔喜色アリ。両手及全  
身破裂スルニ至ル。其間ラマ、ラマサルター、ラマ

ラマサルターノ語ヲ連唱ス。則チラマ佛。ラマヨ  
余ヲ成佛セシメヨ。ラマヨ余ヲ成佛セシメヨト  
ノ意ナリ。此ノ如クニメ大街ヲ通過シ。勇氣ヲ鼓  
舞スルノ朋友ニ誘引セラレ。夫屍ノ焼所ニ近接  
ス。而シテ傍ニ設クル所ノ水窪ニ来リ。身ヲ洗フ。  
洗後黄色ノ華衣ヲ着ク。貴價ナル衣服。及細具ヲ  
親戚ニ分配シ。ブラミネスニ夥多ノ施物ヲ捧ケ。  
火坑ニ向テ敬禮ス。坑ニハ熾炭アリ。之ヲ隔ツニ  
蓮ヲ以テス。婦人ノ危懼スルヲ防ク為ナリ。坑側  
ニハ坑ヨリ出スノ土アリ。山ノ如シ。婦此山ニ上



三  
リ再ニ朋友ニ最後ノ告別ス。朋友ハ其婦ノ勇氣  
ヲ歎舞スルナリ。而メ婦ハボラニグ。即チ拵ト箕  
及他ノ家具ヲ苞ニ包ミ之ヲ火中ニ投テ自ラ頭  
上ニ油壺ヲ戴キ其少許ヲ頭上ニ注ク。此等ノ件  
ヲ終テ後。筵ヲ除キ火坑ヲ定視シテ躍テ之ニ入  
ルナリ。是ニ於テ看護人ハ各焚杖ヲ投シテ火勢  
ノ速カニ休ニ及フヲ期シ。灰燼トナルヲ羨フ。  
此ノ如クニノ終焉スル婦ハセツトレアリスウエイシ  
ニス。或ハソウトラニスノ族ナリ。又ブラミネ  
ス。派ノ婦ハ更ニ残酷ナル死ニ就クナリ。則チ其

男ト共ニ踏張り扱ニ上リテ坐シ。両体共ニ積薪  
中ニ在テ。頭上ニ少許ノハルポイセン油松脂ノ類ヲ  
注ク。準備既ニ終ル後。婦ノ危懼シテ遲疑スルア  
リ。然ル片ハグラミネハ火勢ヲ止メ徐クニ死ニ  
就カシム。但シ苦痛最モ甚クシ。  
此燔死ノ外。別ニ一種ノ婦人ノ死法アリ。則チ笛  
聲。鼓聲ニ乘シテ。婦人坑内ニ入り。夫ノ屍ニ接シ  
立テ。漸次ニ土ヲ掛テ坑底ニ坐シ。屍体ヲ抱キ。滿  
爐ノ火ニ香ヲ炷キ。次第ニ坑ヲ埋メシム。婦自ラ  
土ヲ掩キ集メ。半身ニ至ルニ及テ。衣ヲ脱シテ坑



口ニ張り。劇毒ヲ服シ。頸ヲ衣後ニ出ス。  
日本人ノ同シク釋迦ヲ奉スル者。男子ニテモ女  
子ニテモ此ノ如キ残酷ナル所業ヲ為ス者アリ。  
是自ラ以テ無上ノ榮譽ナリトシ。深坑ニ入り。之  
ニ埋没スルアリ。唯一ノ小氣道ヲ存ス。但シ饑餓  
スルカ為ニ死ス。江戸ノ外ニ於テハ。此法ニテ自  
殺スルノ例。屢聞ク所ナリ。  
再ヒ使節ヒリシウス氏及ブルトクホルスト氏  
ノ話ニ及フヘシ。則チ其到着ヲ筑後殿及三郎左  
衛門殿ニ報知セシハ。十二月三十一日ナリ。  
千六  
慶安

兩使拜謁

百五十年。一月二十九日ニ至ルマテ。江戸ニテ東  
三  
印土商會ノ定旅舎ニアリ。日本將軍ニ進物ヲ捧  
クルノ榮ヲ得タリ。奉書アリ曰ク。明朝登城親シ  
ク進物ヲ捧クルノ預備ヲ為スヘシト。依テ兩使  
ハ風呂日本入ハ。浴槽ヲ新ク名クニ入り。身ヲ清  
潔ニス。凡ソ將軍ニ伺候スル人ハ。皆日々洗浴セ  
サル者ナシ。  
フリシウス氏及ブルトクホルスト氏ハ。筑後殿  
ノ奉書ニ因テ。定時ニ準備セリ。抑モ何故ニ日本  
將軍ハ京都合ナリトシテ。今日迄拜謁ノ期ヲ違



延セシヤ。若シ夫レ最好ノ時節ヲ待タハ二月ヲ  
モ徒過スヘキナリ。四月六日使節トナリ。朝執政  
及幼將軍得<sup>ホ</sup>タル全健康ヲ<sup>ル</sup>ニ進物ヲ捧リ。翌日九  
時兩使ハ乘物ニテ登城ス。他ハ徒行ス。市街ニハ  
人民聚觀堵ノ如シ。宮殿ニ近ツクニ及テ共ニ乘  
物ヨリ出ワ。大室ニ入ル。半ハ漆塗ス。半ハ精筵ヲ  
敷ク。二三人ノ警固者アリ。是ヨリ美室ニ誘ワル。  
**三**然レ氏太ニ相隔離ス。待ツ。一時半ニ先ツヒ  
リシウス氏。次テブル。クホルスト氏。四執政ニ  
謁ス。四執政將軍ニ上申ス。使節ハ進物ヲ捧ク。隨

テ幼將軍ニモ捧ケリ。  
又シカラスノ説話止ミ。兩使ハ許可ヲ得テ。旅舎  
ニ歸レリ。唯商人コルネリス。マエト氏。及阿蘭銀  
工ノミ遺リテ。献上品中ノ銀船ノ取扱方。及帆ヲ  
張ルノ状等ヲ。日本人ニ傳達ス。此教諭ノ為ニ二  
時ヲ費ヤシ。歸舎セリ。  
日本將軍宮殿ハ。非常ニ驚クヘキナリ。外壁ノ外  
ニ堅固ナル柵アリ。茨尺ノ溝アリ。此溝ト柵トノ  
間ニ廣道アリ。日々數千ノ乗物。及無數ノ人員。彼  
此往復スル所ナリ。此壁ハ堅石ニテ築キ。高ク且



厚シ。突出スル所アリテ。郭ノ構ニ似タリ。外堤ニ  
ハ深ク且廣キ溝アリ。之ニ橋ヲ架ス。頗ル高シ。門  
ニハ厚キ鍊棒ヲ以テ軸ト為ス。扉アリ。二枚。四  
角ニノ高シ。各扉ニ各箇ノ屋脊アリ。兼テ壁ヲ支  
柱スルニ足ル。上部ノ四角ノ両側ニ吹流シノア  
ルニ。旒ノ長キ旗ヲ立ツ。之ニハ騎馬武者ノ像ヲ  
画ク。門ニハ常ニ嚴重ノ警固アリ。外壁ニ沿テ内  
側ニ兵卒ノ用ニ供スル無数ノ武器アリ。此武器  
ハ整然排列シ。地上ニ立ツ。但シ第二溝ヲ又フル  
地ナルヲ以テ。各々屈曲ナキヲ得ス。蓋シコロシウ

エルク。鎊物郭ノ構。及櫓。突出スルニ由ル。内外共ニ  
嚴重ナリ。第二門ニモ嚴重ノ警固アリ。茲ニ第三  
溝アリ。美ナル石橋ヲ架ス。之ヲ過クレハ第三門  
アリ。石壁ノ間ハ極テ立派ニ墾ヒリ。  
此土手ニハ多数ノ輪サシ出シ。切り目差出タル  
半圓形ノ構。護胸壁。凹凸所。櫓。及營所アリ。高價ナ  
ル。ドリルホヲ出ロヲ失フ様ニ道ヲ梅テ其内ニ  
ニ似タリ。迂回。炎曲ナルヲ知ラス。既ニ第三門ヲ  
過クレハ廣大ナル空地アリ。直ニ前行ス。目ヲ  
極テ將軍ノ偃息所。極テ高キ櫓。及樹木アリ。嚴重



ナル壁ヲ構フ。左側ハ壁大ニ曲リ。右側ハ平ニシ  
同シ。彼此ニ阜後ニアリ。茲ニ將軍ノ殿堂アリ。第  
三门ノ後ニ將軍ノ玄關前アリ。第一ノ玄關前ハ  
四角ナリ。其奥房ニハ二十八本ノ杉柱アリ。周回  
用豁ナリ。屋脊ハ稍斜ナリ。而シテ更ニ第二ノ建物  
アリ。壁ニテ護ス。第二ノ屋脊四隅突出ス。第一ニ  
併セテ他ノ玄關前ヲ見ル。第一房ハ前ニアリ。四  
柱ヲ具ス。亦四方用豁ナリ。然レテ後ハ新建築ノ  
為ニ壁ニテ鎖ソ。共ニ四角ニノ高シ。  
此玄關前ハ園圃ニテ大ニ慰樂スヘシ。用豁ナル

地ヲ眺望スヘシ。其園圃ハ天人工賤カヲ惜マ  
ス。營ム所ナリ。逕ニハ樹木ヲ植ユ。花壇ヲ奇麗ニ  
分ツ。園ノ右側ニ丘アリ。其頂ニ殿堂アリ。是將軍  
ノ神ヲ奉スル所ナリ。  
但シ上ニ記スル第三門ノ左側ニ六極ヲ美麗ナル  
宮殿アリ。前殿ハ二重屋脊ニテ他殿ニ跨ル。其下  
縁ニ四方大ナル金ドツブカグセヲ備フ。  
第一屋脊ニ第二ノ建築アリ。茲ニ極テ結構ナル  
粧飾。及美麗ナル景色アリ。上ニ記スル用豁地  
又三重ノ半圓形ノ構ヲ見ル。此第一宮殿ト第三



内壁トノ間ニ護衛兵アリ。以テ内壁ヲ警固シ。日々交代ス。其兵三千ナリ。第一宮殿ニ次テ。第二宮殿アリ。長サ相同シ。然レ凡高サ均シカラス。屋脊ハ共ニ金光燦爛タリ。此兩宮殿間ニ結構ナル建物アリ。擗ノ如シ。此諸建物ハ。將軍ノ親近血族ノ住居スル所ナリ。

此後ニ驚ク一キ建物アリ。凡立ス。就中三擗アリ。尤モ高シ。皆四角ナリ。九層ニノ天ニ達ス。各室上ニ屋脊側壁外ニ突出スル。一ニ二尺上ルニ隨テ漸次ニ小ナリ。中擗最モ大ナリ。其尖端ニ極テ結

構ナル非常大ナル鯰魚立ツ。共ニ厚キ金板ニテ被フ所ナリ。中擗ノ直前ニ結構ナル謁見所アリ。鍍金ノ柱アリ。天井ニハ諸般ノ画樣ヲ彫刻シ。金彩紛乱ス。屋脊ヨリ金光ヲ放ツ。是日本將軍ノ外國使節。又内國人ニテハ皇族。王族ニ對スル片出座スル所ナリ。其側ニ立派ナル奥向建物アリ。各室ニ區分ス。ヒリシウス氏及ブルクホルスト氏兩使ハ。四月七日ニ四執政ニ謁シ。退出スル後。翌日再ヒ筑後殿。及三良左衛門殿ノ指圖ニ依リ。衆物ニ衆リ。



日光紀事。

從者ハ騎馬ニテ登城シ。上ノ宮殿ニテ告別セリ。  
フリシウス氏先ツ執政ニ謁ス。次テブルークホ  
ルスト氏亦然リ。應接異ナルヲナシ。兩使節ハ日  
本將軍ヨリ答禮トシテ。絹ノ時服ヲ賜レリ。且長  
崎ニ歸ルヘキ許可ヲ得タリ。  
然レモ江戸ヲ出立スルノ前ニ。教員ノ執政邸ニ  
至リ謝辭ヲ述ハサルヲ得ス。四月十六日準備成  
ル。若シ夫レ使節致回將軍ニ謁スルヲナカリセ  
ハ。前將軍ノ廟所ニ參詣スルヲ得タル容易ナ  
リシナルヘシ。是江戸ヲ距ル一四日程。山丘ニア

リ。山麓ニ重壁圍繞ス。壁間ニ四角ナル廣キ門ア  
リ。厚キ重扉アリ。兩側ニ二個ノカトベルレシア  
リ。内方ニ壁ニ向テ築ク共ニ高サ四カントナリ。  
上層屋脊ノ外縁ニ金ノ被ヒ物アリ。左側ニハ廣  
キ石道アリ。兩外縁ニハ手摺アリテ之ヲ護ス。此  
道ヨリ岡ニ上ル四十級アリ。以テ第二門ニ至ル。  
兩側ニ鍍金セル塊アリ。尖端漸ク細シ。是ニ於テ  
ニ壁ヲ以テ岡ヲ分劃ス。左ニハ細長キ殿堂アリ。  
右側ニハ密樹蔚蒼タリ。此樹外ノ道ヲ進ノハ立  
派ナル堂アリ。羊腸ノ道ヲ過テ第三門ニ達ス。ニ



個ノ石壁ヲ過テ進行ス。中間ニ廟所ニ向フノ小道アリ。岡ノ高所ノ陰ニ廟所アリ。此廟所ハ實ニ精巧ヲ極ムル所ナリ。四塔アリ。高ク天ニ聳ル。中間高價ナル建物アリテ相連續ス。高塔ノ内ニ遺骸ヲ藏ス。茲ニ百五十燈ヲ掲ケ。晝夜火ヲ點ス。

⑤日本將軍ハ貴人ノ重大事件アリテ犧牲ト為ス。一キヲ祖先ノ靈ニ告クルニ非サレハ。茲ニ至ル。一ナシ。犧牲ハ第一門傍ニ設クル禮拜堂内ニ置テ。長ク禮拜スルナリ。下ノ表通ハ八個ノ四角ナル柱ヲ具ス。半ハ壁ヲ墺ス。各柱ノ間ハ立派ニ粉

粧ス。扉ハ二重ナリ。双方柱ノ中間ニ二扇相集合ス。屋脊ノ縁ニハ鍍金セル画像ヲ粧饒ス。下層ハ第二建物ヲ支テ分テ教室ト為ス。

此禮拜堂ニ銅製ノ燈籠アリ。是享千九百三十六年禄。

東印度商會ヨリフランシスカロニテ日本

將軍ニ獻スル所ナリ。此燈籠ニハ三枝アリ。其重

サ七百九十六磅ナリ。此時カロニヨリ日本將軍

ニ併セテ獻スル所ニ個ノ大ナル波斯アルカテ

一ハシ不詳。一片ノ黑色普魯社天鵞絨。十二ノ亞鉛

ル不詳。又各種羅紗十四枚ナリ。執政讚岐殿



送葬式。

大炊殿。アクトフドノ。加賀殿。タイキモンドノ。伊  
豆殿。志摩殿。豊後殿。トリウニマ。備中殿。大藏殿。ネ  
ーシンドノ。及。デイシンドノ。各々進物アリ。日本  
参政以下ノ人。ハ。及。ハ。ス。  
抑。モ。日本。人。ハ。非常。ニ。名。ヲ。求。ム。ル。ノ。性。アリ。故。ニ  
送葬。ニ。モ。巨額。ヲ。賞。ヤ。ス。ナ。リ。高貴。人。ノ。送葬。左ノ  
如シ。送葬。前。一。時。ニ。親。族。朋友。死者。ノ。家。ニ。會。ス。皆  
白絹。ヲ。服。ス。是。喪。服。ナ。リ。又。親。戚。及。朋友。ナル。婦。人  
モ。相。緼。ク。頭。上。ニ。各。色。ノ。被。フ。リ。物。ヲ。戴。ク。非常。ニ  
富豪。ヲ。飭。リ。杉。木。ヲ。以。テ。巧。ニ。造。レ。ル。高。價。ナル。乘  
物。ニ。テ。荷。フ。而。シ。多。人。隨。行。ス。

⑤次。テ。大。和。尚。アリ。常。ニ。遺。骸。ニ。接。近。從。事。ス。是。亦。乘  
物。ニ。乘。リ。粧。飭。燦。然。タ。リ。三十。僧。アリ。側。ニ。アリ。頭  
上。ニ。廣。キ。帽。ヲ。蒙。ム。腹。ニ。ハ。木。綿。ノ。肌。着。ヲ。服。シ  
此。肌。着。ノ。上。ニ。黒。色。ノ。精。緻。ナル。外。套。ヲ。服。ス。外。套  
ハ。灰。色。ノ。上。着。ノ。下。ニ。隠。ル。手。ニ。長。キ。松。枝。ノ。炬。火  
ヲ。持。ツ。是。道。ヲ。照。ラ。フ。迷。步。勿。ラ。シ。ム。ル。為。ナ。リ。此  
三十。僧。ニ。次。テ。更。ニ。二。百。僧。アリ。隨。從。ス。此。輩。唯。其  
死者。ノ。生。時。ニ。於。テ。常。ニ。信。仰。ス。ル。所。ノ。佛。名。ヲ。及  
復。唱。フ。ル。外。他。事。ヲ。為。サ。ス。又。大。鐘。ヲ。鳴。ラ。シ。及。ニ



個ノ廣キ紙製ノ籠ヲ荷フ。此内ニハ各色紙製ノ  
蓮花瓣ヲ盛ル。此籠ハ長棍ニ固繫ス。則チ且振リ  
且歩行スレハ花瓣飛散スルナリ。是死者ノ靈魂  
極樂ニ至ルノ兆ナリ。此籠ヲ振フノ僧ニ次テ他  
ノ幼僧八人アリ。二行ニ併列ス。共ニ旗ヲ附タル  
長キ竹ヲ持ツ。是ニハ佛名ヲ記スルナリ。又燭ヲ  
點スルノ燈十個アリ。此燈ニ沿テニ少年灰色衣  
ヲ着ケ松炬ヲ持ツ。但シ火ヲ點セス市街ヲ出テ  
其炬ニ點火シ以テ屍ヲ焚クニ供ス。  
屍體ニ隨テ群人之ヲ送ル。皆灰白衣ヲ着ク。頭上

ニ小笠ヲ戴キ領下ニ結締ス。笠ハ三角狀ナリ。黒  
色ノ光輝アル革ニテ製ス。之ニ紙札ヲ點ス。亦死  
者ノ曾テ信仰セシ所ノ佛名ヲ記スルナリ。此ノ  
如クニノ多人經過セシ後一人アリ高ク大札ヲ  
捧ク。之ニモ亦佛名ヲ記スル所ナリ。  
既ニノ四人ニテ柩ヲ荷ク。屍ハ此柩内ニ在テ坐  
シ頭ヲ前ニ傾ケ兩手ヲ組ミ參佛スルノ狀ヲ為  
シ。白衣ヲ着ケ紙製ノ外套ヲ被フ。而シテ死者生時  
ニ於テ信仰セシ佛ニ奉スルノ經文ヲ記スルノ  
書冊ヲ以テ體ヲ埋ム。蓋シ平日信仰スルノ佛最



モ幸福ヲ共フヘシトスレハナリ。柩ニ接シテ盛  
粧セル其子立ツ。最モ少年ノ子松炬ヲ執ル。以テ  
焚杖ニ火ヲ點スルニ供ス。最後ニ一般送者隨フ。  
皆頭上ニ上ニ記スル三角狀革製笠ヲ戴ク。  
衆人皆焚所ニ至レハ之ヲ圍繞シ號哭ス。僧ハ銅  
盤及鐘ヲ鳴ラシ。衆人佛名ヲ唱フ。此ノ如クスル  
一凡ソ一時其間焚坑ノ處置左ノ如シ。四方開豁  
ノ地ニ於テ廣キ格子ト延ニテ圍ヒ四方ニ入口  
ヲ設ク。東西南北ナリ。中部ニ凹所アリ。焚杖ヲ盈  
ツ上邊ニ幕ヲ張ル。凹所ノ兩側ニ一札アリ。諸種

ノ食物ヲ備フ。多クハ血ヲ以テ捏ネル。而ノ菓糕  
及果實ナリ。絶テ魚及獸肉ヲ供スルヲナシ。又此  
札ニ香燭及香料ヲ具ス。既ニ焚所ニ近接スレハ  
柩ニ長キ繩ヲ繫キ。各人此繩ヲ執リ一齊ニ佛名  
ヲ唱フ。死者ヲ尊敬スルヲ愈厚ケレハ唱名スル  
ヲ愈久シ。而ノ外圍ヲ廻歩スルヲ三回。  
⑤終ニ柩ヲ焚杖ノ上ニ置キ坊主未テ準備シ。唱ヲ  
唱フ。其語傍人ニハ解スルヲ得ス。炬火ヲ以テ屍  
ノ頭上ヲ旋ラス。三回蓋シ魂魄始ナク終ナキ  
ノ意ヲ表スルノ語ヲ唱ヘテ其炬ヲ投ス。二人ノ



血族一ハ柩ノ東方ニ立チ一ハ西方ニ立ツ而シテ  
共ニ焚杖ヲ集積シテ三堆トナシ一齊ニ炬ヲ投  
シテ之ヲ焚ク此時別人アリテ油ヲ焚杖ニ注キ  
且香料ヲ炷ク忽チ火焰天ヲ衝ク既ニノ屍ハ灰  
トナル

其子及血族ハ二札ノ傍ニ在テ柩ヲ焼キ屍ノ靈  
魂天堂ニ升ルヲ拝禮ス拝禮終ル後坊主ハ其身  
位ニ應シテ各々謝儀ヲ受ク葬事ヲ擔當スル者  
ハ少クモ二十ジユカレテ下ラス下等ノ僧  
ハ少額ヲ受ク一ジユカレトハ我金一圓ト二十三錢八厘五

朋友及僧徒退散スル時柩ニ從事スル人及他ノ  
要務ニ關スル者ニ食事ヲ供ス此人火勢ヲ見テ  
喜フ可シトス翌日子弟婦妾及朋友此焚所ニ来  
リ骨骸盡ク拾フテ鍍金壺ニ納メ携テ家ニ歸リ  
衣ヲ以テ之ヲ被ヒ室内ニ置ク  
坊主再ニ其家ニ来リ法事ヲ行フ七日毎ニ及復  
ス是ニ於テ遺骨ヲ土中ニ埋ム或ハ四角ナル石  
ヲ建テ其人曾テ信スル所ノ佛名ヲ刻ス自後子  
弟ハ日々之ニ參詣スルナリ花ヲ捧ケ温飲盛膳  
ヲ地上ニ置キ死者ノ心カヲ强壮ニスルトス



然レ此ノ如キ葬禮ヲ行フニハ三千ジユカーレン  
以上ヲ費ヤス而ノ尋常紳士ハ更ニ二三百ヲ費  
ヤシ年々法事ヲ行フ之ヲ盆ト称ス各家燈ヲ捧  
ケ廟堂ヲ粧飾ス無致ノ人員市外ニ出テ食物ヲ  
盃ニ盛り靈魂ヲ迎テ我家ニ導カントス但シ此  
法事ヲ行フノ前ニ靈魂ハ既ニ遙カニ天ニ登ル  
トスル所ナリ

更ニ日本人骨骸ヲ埋ムルノ後ノ所業ヲ説ク一  
シ則チ嚴ニ喪ニ居ルノ二年諸般ノ遊樂ヲ廢シ  
衣服哀傷ノ状ヲ呈ス頭上ニ帽ヲ戴ク上邊ハ扁

ニノ前ハ角ナリ後ニハ廣キ絹布アリテ整テ腰  
ニ至ル外套ハ非常ニ濶シ胸上ニテ相交又ス常  
ニ手ヲ袖中ニ刺ス此外套ハ卷キ揚クルノナク  
皺褶スルノナク透孔アルノ勿ル一ニ廣キ帯ヲ  
纏フニ通ニシテ締メ外套下ニ袴ノ下邊恰モ裳  
ノ如クニ足ニ至ル衣服ハ總テ灰色ニシテ漂白  
セサル麻布ニ成ル

○此ノ如キ埋葬法及法事ハ決シテ貧人ニハ能ハ  
サル所ナリ貧人ハ一僧ヲ招クヲ得ス蓋シ謝金  
ヲ辨セサレハナリ死者ノ靈ヲ保存スルノ注意



ヲ缺ク。就中此輩ニハ魂魄不死ノ説ヲ。或ハ竊カ  
ニ。或ハ公然トシ。非毀スル者アレハナリ。貧民ノ  
屍體ハ日本ニハ貧民多シ。是人員夥多ニシテ給料  
ヲ得ル。僅クナルニ由ル。夜中。或ハ不時ニ彼此  
近傍ニアル糞壺ニ投スルアリ。

阿蘭使節江戸ニテノ談緒ヲ更ニ緝ク。八日光將  
軍ノ廟所ニ參詣スルノ機會ヲ得ス。抑モ日光廟  
所ノ結構ナルハ諸寺ニ冠タル所ナリ。東印土  
商會ヨリ日本將軍ニ獻スル所上ニ記スルカ如  
ク。銅燈籠ヲ阿蘭ヨリ日本ニ遠路ヲ隔テ贈ル所

猿寺

ナリ。フリシウス氏及ブルークホルスト氏江戸  
ヨリ長崎ノ帰途ニ就ケリ。千六百五十年四月十  
六日ナリ。則チ品川六郷川崎神奈川程ヶ谷戸塚  
ヲ過ク。途次有名ナル猿寺ニ至レリ。其建築ノ壯  
大ナル。其佛像ノ異容ナル。世界萬國比スレ  
キ所ナシ。爰ニ狡獪ナル獸ヲ置ク。末世ニ遺ス。猿  
ハ他ノ道理ヲ解セサル獸類トハ同一視不可ラ  
サルハ疑ヲ容レサル所ナリ。舊時希臘及羅甸記  
者ノ説ニテハ猿及牛ヲ神ト為シ奉スル意ハ一  
ハ生活セル黒牛ニテ頭上及背ニ白斑アリ且多



毛ナリ。此神ハ厄日土祭事ニ定時ニ使役スレハ  
長生シ得ス。當時一日使役セラレハ其牛ラ又セ  
名クト神聖ノ湖水ヲ飲ム。猿死スレハ厄日土人ハ  
喪ニ居ル。老若共ニ猿ニ跨リ。胸ヲ敲キ。毛及衣ヲ  
裂ク。若シ他所ニ於テ新猿出ルアレハ全國拳テ  
歡喜ス。然レ氏答辭ヲ為サハル。アボル。ロデビ  
キユス。ユビテル。ドドナ。ラ。ス。アム。モン。オツ。プト。ロ  
ポニウ。ス。ノ。魔談ノ如クナラス。或人ヨリ捧クル  
ノ食物ヲ食スル片ハ無難ナルヲ徴ス。若シ之ヲ  
投擲スル片ハ不安ヲ徴スルナリ。故ニ日耳曼帝

捧クル所ノ食物ヲ食セサル片ハ其速カニ零落  
スルヲ報知スルナリ。

オシリス。

オシリスハ灰色牛ニテ首ニ斑アリ。其足ニ目ノ  
アルシケアル。王ノ持ッ。ヲ附ス。以テ威權ト智  
識トヲ具スルノ徴トス。舊時ノ厄日土王ハオシ  
リスノ墓ニ活人ヲ牲ト為セリ。但シ其後此残酷  
ナル所業ハ廢セリ。又赤鷲色ノ牛ハ同屬ナリト  
ス。蓋シテトボレ。スト大ニ同シケレハナリ。之ヲ  
オシリスノ牲ト為ス。  
余茲ニゴリニウス氏ノ語ヲ掲ク。一シ曰ク厄日



土ニテハ牛ヲ奉シテ神トシ之ヲアビスト称ス  
二寺アリ其一ニ詣スレハ幸福ヲ得ヘク他ニ至  
レハ悲哀スヘキ前徴ナリ評議役ノ手ヨリ食物  
ヲ取ルハ祈願スル所ヲ成スナリ日耳曼帝ノ手  
ヲ嫌フ片ハ遠カラズノ死スルナリ又尊敬シテ  
歌唱スルニ方テ猿ノ隱伏スルヲアリ又多子ヲ  
伴フテ出現スルヲアリ是意ヲ領シ命スル所ア  
ルニ似タリ

希臘記者ストラボ氏曰クヘリオポリタニシセ  
地方ニハ高堤上ニ日ノ市アリ日及オスセムネ

ウシスノ宮殿アリ其中畜獸ヲ飼フノ小屋アリ  
ヘリオポリタニシ人ハ之ヲ神トスルハ猶ノム  
ビテルスニ於ケル猿ノ如シ  
ヘルドケウス氏既日土人ヲ記ス曰ク猫ヲ奉シ  
テ神ト爲スト室内ニ塩ヲ撒スビユバスキスヲ  
送ル後立派ナル教禮ヲ行フ此安全ナル市ニ埋  
メラルヲ求ムルナリ之ヲ証スルハシセロ氏デ  
オドリユスキユリエス氏アリユタルキユス氏及ユヘナ  
リス氏ナリ  
此事ニ就テセレスロマニユス則チ其名不



詳ノ人曰フアリ。注目スヘシ。曰ク某既日土人ハ  
アビスト名クル牛ニ神事シ。或ハ野牛。或ハ猫。或  
ハ蛇ヲ喰フノ鳥ニ奉事シ。或ハ魚等。又他ノ無致  
品。又余名ヲ明言スルヲ耻ル者ヲ神トス。  
タレノンスアレキヤンドリニユス氏曰クサイ  
タ人及テバトネル人ハ羊ニ又リコボリタトネ  
ル人ハ狼ニ奉事スレオボリス人ハ獅子ヲ四足  
獸中ノ王トス。故ニ波斯人ハミタラ佛ニ獅子頭  
ヲ画クノ日ヲ現ス。  
是ニハブリユタルキユス。獅子ヲ日ニ加フルノ義ヲ

説明スルアリ。則チ獅子ハ曲手獸中ノ最ニノ一  
子ヲ生ムナリ。又睡眠極テ短カシ。瞳中尚眼光ア  
リ。又レオンチネルスニ據レハ太陽天宮ノ獅  
子ヲ過クレハ井及澤ニ満水ナルヲ見ル。  
言ストラボス氏曰クノンデシールス人ハ山羊及  
野牛ヲ神ナリト尊奉ス。エリヤニユス氏曰クコ  
ヒラリテンハ何故ニ截リタル野牛ヲ食スルヤ。  
而メ尚野羊ニ神事スイスシ神ヲ敬禮シテ慰愉  
スル為ナリ。然レ他ノ泥日土人ハ野牛ヲ神以  
下ニ置クアリ。ジオドリユスシキユビユスニ據



レハ蓋シ陰莖ヲ具スレハナリ故ニ希臘人及羅  
甸人ハ此不都合ナルプリアヒユス神ヲ取ラス  
抑モ生殖ハ此陰莖ニ出ル所ナリ野牛ハ他獸ニ  
比スレハ最大ナル陰莖ヲ具スルカ故ニ之ヲ神  
ト為スノ采アリトスルナリ  
ヘロドテユスハノンデシールスヲ評シテ曰ク  
此輩ハ盛ニ山羊ヲ飼養スル人死スレハ衆人皆  
喪ニ居ル蓋シ元來山羊ハ總テ神事スル所ナレ  
ハナリ  
又泥日土人及希臘人ハパント称スル佛ヲ画ク

ニ其面容及足ハ必ラス山羊ニ擬ス而シテ他佛ニ  
同シトスヘロドテユス又曰クノンデシール婦  
女ハ之ヲ野牛ト同一視ス故ニ野牛ト接近スレ  
ハ神精ヲ受テ妊孕ストスアトリビラニハ有名  
ナルストラポ氏ノ保証ニ據テウエーセルト麓嵐  
トヨリ生スル子ヲ神ト為スグリユタルキエス氏ハ  
此卑賤物ヲ造物主ナリトスルノ理ハ此物新月  
ニ方テ麓嵐ヨリ生シ減月ニ方テ其肝復々消滅  
スレハナリトス  
三 印土嵐ハラトナ及イリテア則チリユシナノ神



事スル所ナリ。エリアニユスノ説ニテハ。印土鼠  
ト。蝮蛇。及鱷魚ト相争フ。而シテ泥日土人ハ大ニ此  
ニ物ヲ忌ミ。専ラ鼠ヲ神トナシ。尊奉スルナリ。蓋  
シ鼠ハ能ク此ニ物ヲ殺スヲ以テナリ。然レモ泥  
日土人。皆悉ク印土鼠ヲ尊奉スルニアラス。或ハ  
却テ鱷魚ヲ尊テ。鼠ヲ卑シム者アリ。是鼠ノ鱷魚  
ノ卵ヲ破碎シ。或ハ之ヲ殺セハナリ。則チ鱷魚暄  
ヲ負テ口ヲ開クヲアレハ。鼠其口ヨリ腹ニ入り。  
之ヲ穿テ復ヒ体外ニ出ルナリ。故ニ鱷魚ヲ愛  
スル者ハ鼠ヲ惡ミ。鼠ヲ愛スル者ハ鱷魚ヲ忌ム。

是泥日土人相分黨スル所以ナリ。  
ストラポノ外シセロ。ジオドリユスシキユリユ  
ス。ユヘナリス。ブリユタルキユス。及アリアニユ  
ハ。共ニ証スルナリ。オムビチセ。泥日土人ハ。鱷  
魚ヲ尊奉スル。猶希臘人。及羅甸人ノオリム。ブ  
セ。神ヲ大ニ卑下スルカ如シ。然レモアボルロレ  
ポリチセ。泥日土人ハ。鱷魚ヲ罵詈ス。蓋シテ。ホ  
ノオシリス。ノ爲ニ殺サレタル。片ニ鱷魚ノ形ヲ  
取リタルト。又プサムノ。ミチユス。ドクトル。及  
泥日土ノ極テ正實ナル王モ。鱷魚ノ爲ニ吞マレ



タルトアレハナリ。  
ストラポ又曰クセーレンネンノ一民  
レ氏及尻日土ノテンテリ  
ニノ奇チアリ甲ハ蝮蛇ヲ  
役ステレテリ  
鯉魚ヲ注視シ而ノ容易ニ能ク之ヲ殺スナリ是  
ニ於テ羅瑪ニテ曾テ一觀場ヲ開キ水中ニテ鯉  
魚ヲ捕ヒ之ヲ地上ニ出シ衆人ノ眼前ニ明示シ  
而シ復ヒ之ヲ池中ニ放チシ  
ストラポノ考案ニハ往時アルシ  
一地ア

リ鯉魚街ト名ク蓋シ僧徒アリ此怪物ニ餅糕肉  
及酒ヲ薦シ之ヲ湖水ニ投シ以テ牲トセリ  
マキスミユスナリウスノ説ヲ掲ケテ以テ一案ニ  
供フ曾テ一尻日土人アリ鯉魚ノ子ヲ養フ故ニ  
尻日土人ハ之ヲ神聖ナリトシ日々衆多參詣敬  
事シ謹テ食物ヲ進ム此人此鯉魚ト同年ノ一子  
ヲ育ス幼時相共ニ親睦遊嬉ス然ルニ成育スル  
ニ隨テ鯉魚ハ多カトナリ卒然其子ヲ吞ミ殺セ  
リ其母悲哀シ且大ニ驚駭セリ蓋シ其子ヲ以テ  
神聖ナリト自負セシ者此災ニ罹リタレハナリ



猿寺

③希臘及羅甸記者ノ基督前後ニ存生セシ者ノ説ヲ以テスルニ尋常諸佛ノ外獸類ヲ尊奉スルハ極テ古代ヨリスル所ナルヲ知ルヘシ就中猿ヲ尊奉スルハ絶テ他獸ノ比ニ非サルナリ。戸塚ヲ距ルヲ遠カラスノ荷蘭使節アリシウス氏及ブルークホルスト氏此驛ヲ過テ長崎ヘ赴クハ千六百五十年四月十八日ナリ。猿寺ニ詣セリ。是日本ニ於テ有名ナル寺ナリ。其建築精巧巨額ヲ費ヤス所ナル一シ。中堂ニ高卓アリ。下脚ハ長サ人ノ半身許ニシテ高ク四角上下ニ銜リタル

縁アリ。平ナルニ層ノ臺アリ。第三ノ最下層上ニアリ。頂上ニハ三重ノ縁ニテ銜リ。四邊漸次ニ挺出シ。下層ヨリハ大ナリ。卓面ハ肖像ニテ銜レリ。下卓脚ノ第一面ニ大ナル銅鉦ヲ置ク。一僧アリ。其傍ニ立テ槌ニテ頻ニ之ヲ強打ス。蓋シ參詣人ヲシテ此音ヲ聽テ信心ノ念ヲ深カラシムル為ナリ。參詣人ハ拜シテ臂ト頭トヲ地上ニ接ス。堂内ノ諸方ニハ弓状ヲ為シテ壁ニ墁ス。此弓状ニハ活猿充滿ス。是日本人ノ大ニ尊崇スル所ナリ。此弓状大ニノ壁外ニ挺出ス。其上画ハ卓ノ如キ



座アリ。各種狀ノ造猿ヲ置ク。或ハ卧スアリ。或ハ  
踞スアリ。或ハ後ニアリ。或ハ側ニアリ。或ハ懸垂  
スルアリ。倒ルアリ。壁ニ對シテ重大ナル臺アリ。  
彫刻精巧ナリ。群猿相倚ル。此臺上ニハ更ニ他ノ  
造猿アリ。形容多種ナリ。僧ノ打鐘ニ應シテ猿舞  
ヲ助クルノ致人來リ會ス。更ニ堂ノ奥ニ高臺上  
ニ屋脊ヲ距ル丁遠カラス。群猿ニ勝レタル一  
造猿アリ。日々盛膳ヲ供ス。  
大ニ驚クヘキハ此ノ如キ猿寺ハ喜ニヘイラレ  
ド時代ヨリ前ニアルノミナラスストラボヨリ

引クノ証ニ據レハヘルモボリタネルス。及巴比  
倫人ハ猫狒及猿ヲ尊敬シテ神事スル。千八百  
年前ヨリス。

此ノ如ク猿ニ神事スルハ實ニ嘲笑スヘキ所ナ  
レ。亞細亞ニテハ廣ク然ル所ナリ。何トナレハ  
帝ニ日本。及支那ニ於テノミナラス更ニマラバ  
ル地方又瑪港ト皮求トノ間ノ地方。錫蘭島ニ於  
テモ猿ヲ神ト為シ奉事スルナリ。有名ナル以太  
利人バルビエス氏。瑪港ヨリ皮求ニ赴ク旅中記事  
ニ曰ク。土人バゴ。テント称スル印土佛ヲ奉尊



ス。猿像ナリ。又狒ヲモ鏈ニテ繋キ。柵内ニ置キ。其  
寺ヲ印土寺ト名ク。

③更ニ着目ス。一キ一事アリ。此猿ニ神事スルヨリ  
博學ナルゲラルドホシウス氏モヨリ。ホイゲ  
ンフハンリンスコーレンノ下ニアリ。錫蘭島葡萄  
牙記者ヨアンネスバルリウス氏ハ明証ヲ示シ  
テ曰ク。此錫蘭ハ舊時ノタプロバナナリトヲ割  
見セシハ。フランシスキユスアルノイダ氏ノ子  
ナリ。此人サラセーンセ商人ニ隨テモリユッセヨ  
リ。亞刺伯ニ歸ラントメマルジトセ諸島ヲ歷過

セシ片ニ碇泊セモ所ナリ。但シ誤テ茲ニ着岸セ  
シナリ。後葡萄牙ノ一軍隊。其王ト共ニ錫蘭ノ西  
部ニ於テ一堅城ヲ建築セリ。之ニ從事スルニ方  
テサラセーンセ商人ヨリ王ニ迫テ。其拄杖商業  
ノ衰頽スルヲ鳴ラシテ。數千人ヲ率テ。嚴ニ其建  
築ノ基礎ヲ潰崩セリ。葡人ハ事不意ニ起ルヲ以  
テ。大ニ敗績セリ。然レモソアリウス周旋シテ之  
ヲ整頓シ。敵ヲ退ケタリ。則チ是ヨリ以後。年々王  
ヨリ其罪ヲ謝スルカ為ニ。百二十萬磅ノ拄杖十  
ニ環ノ寶石。及六頭ノ象ヲ納レシムルヲ約定



セリ。島民ノ亂妨ヲ防クニコロムボ城ヲ築ケリ。  
然レ臣曾テ潰崩セシ者ノ如クニ堅固ナラス。故  
ニリユピユスブリキス氏ハ卧亞ヨリ多人ノ墮エヲ  
送り。其城ヲ粧飾セシメリ。則チ貝ヲ焼テ石灰ヲ  
製シ石及他ノ墮科ヲ造成セリ。錫蘭人再ヒサテ  
セーネニ挑撥セラレ。葡人ヲ襲撃セリ。先ツコ  
ロムボ城ヨリ驅逐セリ。葡人紳士遁竄シテ妻子  
ヲ遺セリ。此時ビチユス氏兵力ヲ以テセス。市  
中ヲ鎮靜シ。他害ヲ為サハラシム。唯婦人子輩ヲ  
戸柱ニ繫縛ス。是一二ハ以テ錫蘭人ニ害意ナキ

ヲ示シ。一二ハ以テ其怒ヲ宥ムルカ為ナリ。此軍  
略幸ニ葡人ノ災ヲ轉シテ福トセリ。何トナレ  
ハ遁竄人コロムボヲ去ル。遠カラス。一群ト  
ナリ。妻子ヲ愛惜スルノ念ヨリ獅子ノ勇氣ヲ奮  
起セリ。コロムボヲ焼失セサルハ全ク葡人ノ力  
ニ出ル所ナリ。何トナレハ其火ヲ滅シ。妻子ノ縛  
ヲ解クカ為ニ大ニ盡カシ。葡人其城内ニ隱匿ス  
ルヲ以テナリ。否ラサレハ之ヲ掠奪セラレ。キ  
所ナリ。幸ニ之ヲ失ワサリシ。錫蘭人ハ二萬人  
ヲ一隊トナシ。コロムボ城ヲ圍ミ。大炮六百門ヲ



高所ニ備ヘ晝間長矢ヲ放ツ。野猪皮ヲ以テ被ム  
リ。二百歩外ヨリ之ヲ射ル者皆貫通ス。夜  
ニ入テ城内ニ鑄彈ヲ投ス。各所火ヲ復スル。頻  
回ナリ。防護ノ人ウナク。且諸事置令ナリ。之ヲ防  
ク一キノ策ヲ得ス止ムヲ得ス。三百五十人ヲ以  
テ敵ニ當リ。微カヲ以テ強兵ヲ拒ムニ過キス。敵  
兵ハ原野ニ充滿セリ。葡人ヲ討ツ。猛烈ナリ。則  
チ二十五ノ象ニ銃手ヲ多ク載セ。象鼻ニ利鎌ヲ  
附シ。頻ニ之ヲ震搖セシム。觸ル者皆損傷ヲ蒙ル。  
此象隊ニ緬クニシシガレス。歩卒ヲ以テシテ。

サラセホシキ助ケシム。百五十ノ強騎兵ヲ以テ  
左右翼トナス。戦争ノ初ニ於テハ稍不利ナレ。氏  
葡人ノ勇ヲ奮テ戦フカ爲ニ象隊退行シ。及テ錫  
蘭人ノ後隊中ニ入ル。他ノ象モ亦彼此ニ在テ錫  
蘭隊ヲ蹂躪セリ。此亂軍ニ乘シテ葡人終ニ卧亞  
ヨリノ援兵ヲ得。天文五十四年ニ錫蘭ヲ火力  
ト兵カトニ依テ乱妨セリ。天  
文五十四年

印土ノ一高山ビョデアダムト名クルアリ。シ  
カレ一人ノ説ニ據レハアダム此地ニ空跡シ。其  
足迹ヲ石ニ留メ。今尚存スルニ由ルナリ。ビョ  
エテ

ビョエテアダム

三



アダム山ノ頂ニ一美堂アリ。狂飭壯嚴。其名世ニ  
赫々タル所ナリ。是ニ於テ葡人之ニ至リ之ヲ奪  
ハントセリ。既ニソ其金櫃ヲ開キタルニ一ノ貴  
石ヲ見スシテ。唯猿ノ齒ヲ貯フヲ見ル。錫蘭人大  
ニ此猿齒ヲ貴重スルハ。之ヲ信心スルノ意ニ出  
フ。故ニ之ヲ得ルニハ巨額ヲ惜マサルナリ。錫蘭  
人則チ使節ヲ葡人ニ送レリ。猿齒ヲ購フニ七萬  
ジユカトテ之ヲ賞セリ。之ヲ貴重スルノ貨幣ニ過  
ク。然ルニビスコフガスハル氏此交易ヲ賤シ  
謂ラク。印土人之ヲ飼フニ禮ヲ以テセサルカ故

ニ復夕神聖ナラスト。乃チ其齒ヲ焼キ之ヲ海水  
ニ投セリ。

ストラボ氏ノ証スル所ニテハ。シンカルル人  
ノミナラス。往時ハヘルモポリタインホル人モ  
猿ヲ尊テ神ト為セリ。余之ヲ証スルニ有名ナル  
詩人ユニウスユヘナリス氏ノ詩ヲ以テセサル  
ヲ得ス。羅甸語ナリ。今荷蘭語ヲ以テ之ヲ譯スレ  
ハ。

昏迷ナル泥日土人ノ異物ヲ尊信スルハ。誰カ  
之ヲ知ラサラセヤ。則チコロヨジールヲ拜シ。



常ニ蛇ヲ喰ハントスルノ鶴ヲ祈ル。是信  
心ノ意ニ戻リ。汚穢ナルバヒアーニナリ。神  
聖ハ金中ニ光輝ヲ放リ。何トナレハメムノ  
スハ切線ナレハナリ。粗音ナリ。且テハ  
百足ナリ。

日本人及他ノ釋教人ハ無智ノ獸類ヲ尊奉スル  
ノ實ニ驚クヘシ之ヲ尊奉シテ神トナシ造物主  
トナス但シ造物主ハ獸類トハ遙カニ其徳ヲ異  
ニスル者ナリ。夫レ真神ハ彼ノ誤慮ヨリ信心ス  
ル異佛教徒ニハ大ニ驚駭スヘキ者ナリ。然ルニ

十二宮

- 白羊 金牛
- 双女 巨蟹
- 獅子 室女
- 天秤 天羯
- 人馬 磨羯
- 寶瓶 双鱼

釋教派ニテハ獸類ヲ尊奉シ。各自ノ性度及効用  
アリテ。人身ニ感應シ。或ハ隱伏セル智略ヲ興ヘ  
或ハ一二ノ記録ヲ想像セシムトシテ疑ヲ容レ  
サル所ナリ。  
希臘記者リユミアニユスノ説アリ。此リユミア  
ニユスノ原文ハ希臘語ヲ以テスル所。今之ヲ蘭  
文ニ譯ス。沉日土人ハモレレニヨリハ見ル所大  
ニ廣シ。抑モ滿天ニ衆星アリ。恒星アリ。皆運轉ヲ  
異ニス。故ニ分テ十二宮トス。此中ニ在テ運轉ス  
各部ニ各獸ヲ配ス。一ハ海貝。一ハ人。一ハ野獸。一



ハ鳥一ハ四足獸ナリ故ニ厄日土人信心スルニ  
各々所業ヲ異ニスルナリ蓋シ諸厄日土人悉ク  
天ノ方角ヲ以テ預言スルニアラス更ニ他ノ天  
境ヲ以テスルアリ則チ牧羊者ハ羊ニ於テシ漁  
者ハ魚ニ於テシステインボツクアル所ニテハ  
ボツクヲ殺スヲナク又スチル星ニ就テハス  
チルヲ尊フナリリビールハ有名ナルスビ  
イテルアマモンヲ尊奉ス釋教派人諸方ヨリ来  
集シテ羔ノ形容ヲ見テ將來ノ吉凶ヲトセント  
三不抑モ羔ハ十二宮ノ第一ニ居レハナリ又牧獸

者ハ獸ヲ尊奉ス但シ直チニ之ヲ神ナリトスル  
ニハ非ス唯神ニ属スル者ニテ神及人ニ恩惠ヲ  
興フルトスルナリ又アエリアニユス曰クデル  
ピスニテハ狼ヲ尊奉ス蓋シバルナシシユス山  
ニ隱伏セル金アルヲ示シタレハナリ又アムブ  
ラシオレテレハ牝獅ヲ尊奉ス何トナレハ暴惡  
人バイルリユスハ子ニ乳スル牝獅ノ裂キ殺ス  
所トナリタレハナリ又アリストテレス証スル  
トアリ曰クトロアスノ軍士ノ崩ニ神事スルハ  
曾テ敵陣ニ入テ弓絃ヲ唾ミ切リタルノ効ヲ感



賞スルナリ。

釋教派人及日本人謂ク人死スレハ魂魄轉シテ  
獸體ニ入ルト故ニ獸ヲ尊奉スルハ人ノ靈魂ノ  
憑ル所ナリトスレハナリ希臘記者ピロルスト  
ラチユス氏アポルロニウスチフネウスヲ評シ  
シテ曰ク其アレキサンドリネルスヲ才智アラ  
シムル所以ハ泥日土王アマンスノ化身ナル獅  
子ヲ馴養スルニ由レリト故ニ僧徒ハ薨去ノア  
マスシヲ供養スルカ為ニ獅子ニハ金製ノ臂環  
頸帶ヲ着ケ泥日土ノ内部ニ送レリ而シテ之ヲ護

送スルニ神歌ヲ唱ヒ聖經ヲ誦シ神事セリレオ  
ントボリス内ニ立派ナル堂ヲ構成シテ獅子ヲ  
置ク所トス蓋シ勇猛王アマニスノ靈魂寄寓ス  
ル所ナレハ租殿ニテハ不敬ナリトスレハナリ  
然レ凡人ノ靈魂移住スルニハ猿ヲ尤モ適當ナ  
ル構成ナリトス何トナレハ其外貌内景大ニ人  
身ニ類似スレハナリ抑モ外貌ハ言ヲ俟タス其  
内景ニ就テハアリストテレス氏說アリ曰ク猿  
ノ内景ハ人身ニ同シ故ニ解剖家人屍ヲ缺ク時  
ハ猿體ニ就テ其術ヲ研究スルナリガレニユス



氏曰ク猿ハ能ク人ノ為ス所ヲ倣フトクイリウ  
スロジギニユス証スル所ノ如シ舊羅句詩人ユ  
ウニユスノ詩ハ人口ニ膾炙スル所ナリ  
猿ハ大ニ人身ニ類似ス且耻ヲ知ルノ獸ナリ  
ニコラースキユルプ君アンゴラヨリブリンヌ  
フハンオラニーフレデリツキーニバヒアー  
ニスノ説ヲ寄ス曰ク是印土人ノオラングオラ  
ングト稱スル所ナリ身長三歳児ノ如ク身大六  
歳児ノ如シ肥胖ナラス瘦削ナラス強壯多力ナ  
リ前頭ハ禿ニノ後頭ニ黒毛叢生ス顔面細モア

オラングオラング

リテ粗糙ナリ鼻大ニ扁壓ナリ之ヲ概言スレハ  
脱齒ノ老婆ノ容ニ異ナラス耳ハ大ニ人耳ニ似  
タリ胸ニ両乳房アリ腹ニ陥没セル臍窩アリ臂  
ハ屈伸スヘク手足ニ全指アリ以上大ニ人身ニ  
似タル所ナリ直立シ運歩シ能ク重荷ヲ攀ク淫  
情動ケハ一午ニ陰莖ヲ擡ケ一午ニテ耳ヲ回ク  
妄掩フ既ニ淫スレハ頻ニ唇ヲ舐ム眠ニ就クニハ  
腹ヨリハ頭ヲ攀ク適宜ニ之ヲ被フ猶腰弱ナル  
少女ノ蓐上ニ在ルノ状ノ如シト更ニ上ニ説ク  
所ノキユルプヲ説ク一シサムバセ王自ラ其近



隣人サロミユエルブルトニ告テ曰ク  
バヒアーネンハ一種ノ男ナリ波羅島ニテ租暴  
ニ軍卒ヲ襲ヒ婦人ニ奸淫スト夫レ猿ハ人ト大  
ニ相似タルヲ以テ日本人殊ニベタゴリセ學ヲ  
信シ魂魄ノ他体ニ移轉スルヲ唱フル人ハ王及  
王妃ノ靈猿ニ移ルト謂フ阿蘭使節ハ戸塚ニ  
在ル猿寺ヲ江戸ヨリノ帰途ニ一見シ十一日ノ  
後則四月二十七日ニ京都ニ着セリ是日本ノ大  
都府ナリ此地ニハ各寺院アリ坊主之ニ住ス其  
内ニハ懺悔シテ塵世ヲ脱セントスル者アリト

虽多クハ唯耻ヲ顧テ惡業ヲ為サハルノミ一雀  
一蠅ヲモ殺サス

三毛羅旬ノ詩人ニ一ナリス氏泥日土人ヲ嘲弄スル  
詩アリ

葱及煙ヲ送ルハ不信心ナリ而メ之ヲ食スル  
ハ妨ナシ園中ニ播種スルモ卓上ニ送ル勿レ  
獸類果實山羊ハ妨ナシ泥日土人ハ自在ナリ  
人ノ腿ヲ多食ス

京都ニハ將軍公方及太閤様并ニ内裡ノ宮殿ア  
リ使節アリシウス氏及ブルイクホルスト氏四

在京中各所遊観  
四月廿日至卅日



月三十日マテ京都ニ逗留ス。其家主及奉行衆誘導シテ神社佛閣ヲ歴觀セシム。則チ衆物ニ聚リ商人ハ同伴シテ社寺構造建築ノ壯大ナルニ驚ケリ。飽マテ諸所ヲ觀ルノ後一休息所ニ憩フ主人盛ナル夕膳ヲ供ス。飽醉シテ夜ニ入り旅舎ニ歸レリ。

壯嚴ナル建築中ノ最ナルハ公方ノ邸ナリ。ロデウエーキフロユス氏ノ証スル所ニテハ改羅巴ニテモ全印土ニテモ此ノ如キノ比ヲ見スト。其園中ニハ杉拍松檜及他ノ名ヲ知ラサルノ樹木アリ。

リ。其排置整然。亭榭堂宇相散在シ。百合薔薇及各種ノ芳香花草アリテ。帝ニ目ヲ喜ハシムルノミナラス更ニ鼻ニ快カラシム。京都鎮臺ノ宮殿亦美麗ナリ。樹木花草ノ佳觀ナルノミナラス更ニ九千歩ノ遠キヨリ水ヲ引テ巖間ヨリ注キ園ノ中央ニアル池ニ流レ入ラシム。此ノ池ノ周圍ニハ密樹蔚蒼タリ。池中各様ノ島嶼アリ。石造或ハ木製ノ橋ヲ架シテ相交通ス。浴外ニ大樹林アリ。坊主ノ五十寺アリ。各寺廣大ナルヲ非常ナリ。ロテウエーキフロユス氏其一ニ



ヲ記スルノ左ノ如シ。此寺院ニハ多クハ諸候ノ子弟住居スルナリ。而ノ其員鮮クナラズ。且各々相競テ美麗ヲ勉ム。余氏ヲロユス。耶蘇教徒ノ誘導ニテ其室ニ入タルニ。漆塗極テ美麗ナリ。前門ヲ入レハ廣所アリ。四角ナル黑色石ヲ敷ク。周圍ニ立派ナル廊下アリ。其壁ノ光澤鏡面ノ如シ。其傍ニ園圃アリ。人エテ盡シ巨敷ヲ棄テ造ル所ナリ。其丘ニ上ルニ貴價ノ石段ヲ以テス。教道アリ。終ニ一ニ歸集ス。丘上ニ矮樹ヲ植ユ。橋ニテ通ス。低地ニハ砂ヲ敷ク。各所敷種ノ樹木ヲ植ユ。終年一

日モ花ナキノ日ナシ。爽快ナル長春ナリ。

長此深林中ニ別ニ一寺アリ。佛像アリ。面貌極テ獐惡ナリ。手ニ獨鈷ヲ持ツ。兩側ニ二魔アリ。巨大ナル一驚クニ堪タリ。左側ノ一魔ハ帳簿ヲ閱シテ。各人ノ罪過ヲ計算ス。他ノ一魔ハ帳簿ヲ誦讀ス。壁ニハ各般苛責ノ狀ヲ画ク。是各人罪障ニ應ニテ輕重アルナリ。日本寺院中參詣人ノ多キ一此寺ニ比ス。一キ者ナシ。賽錢隨テ夥シ。蓋シ賽錢以テ地獄ノ苛責ヲ贖ハントスルナリ。

内裡建築ノ巨大ナルハ内裡ナリ。其構造精緻

内裡建築。



ナルハ古来有名ナル所ナリ。内裡ノ通過スル  
門ハ極テ結構ナリ。前方ニ門番所アリ。披出ス。其  
屋脊ニハ金ノ桶ヲ架ス。表面殊ニ美麗ナリ。此門  
ハ廊下ノ中央ニ終ル。其下ニ兩側ニ四室アリ。上  
層ハ皆圓天井アリ。各室ニ光ヲ通スルノ九廣窓  
アリ。警固ヲ嚴ニス。上下室間ノ外壁ハ精巧ナル  
漆画アリ。内裡ノ記章アル幕ヲ張ル。  
此建築ニ對シテ壁アリ。全園ヲ遶ラズ。土堤ハ石  
造胸壁ナリ。立派ナル番所アリ。内壁ニ沿テ建築  
多シ。前門トノ間ニ廣所アリ。美石ヲ敷ク。内裡行

幸スルハアレハ大ニ華奢ナリ。則チ閑タル輦ニ  
坐シ。美衣ヲ服スル。十四丈ニテ之ヲ荷フ。輦ハ細  
長ク四角ニシテ金具ニテ巧ニ鍔レリ。天井ハ穹窿  
状ニシテ四方ヨリ集マリテ一夫點ニ終ル。四邊ニ  
絹布ヲ張り。内ヨリハ外ヲ見ルニキモ外ヨリハ  
内ヲ見ルヲ得サラシム。輦夫ハ肩上一長棒ヲ載  
セ。荷フ。輦前ニハ護衛ノ士徒行シ。兩側ニハ千百  
ノ日本人地上ニ平伏シテ行装ヲ拝ス。  
内裡ノ輦後ニハ立派ナル衆車アリ。二馬ニテ之  
ヲ曳ク。馬頭ニ美鍔ヲ具フ。二從僕手綱ヲ取ル。馬



具總テ眞珠寶石ヲ以テ飾ル。馬ト乘車トノ間ニ  
二人アリ。甲ハ頻ニ大扇ヲ動カシ。乙ハ高ク日傘  
ヲ掲ク。乘車ノ内ニハ皇妃坐スルナリ。其後ニ美  
車二十輛隨フ。皆二輪ナリ。同シクニ馬ニ駕ス。手  
綱ニテ曳ク。是嬪妾ノ坐スル所ナリ。四方窓アル  
カ故ニ内ヨリハ能ク外ヲ見得ルモ外ヨリハ決  
シテ内ヲ見ルヲ得ス。此一車毎ニ一群ノ宮女ア  
リ隨行ス。其員數夥シク。大ニ行装ヲ飾ルニ足ル。  
又空地ノ左右側ニ各様ノ宮殿アリ。構造ノ法皆  
趣ヲ異ニス。共ニ其工ヲ極ム。國庫ヲ傾ケテ之ヲ

營ム。其側ニ内裡ノ庖厨アリ。之ヨリ食物ヲ調理  
シ出シ。後宮ト内裡ノ園囿トノ間ニ送ル。日々  
百鉢ニ過ク。庖厨頗ル廣大ナリ。土ヲ墁ス。食物ノ  
爲ニ消費スル。一年々金幾トレナルヲ知ラス。  
〔亮〕後部ニ非常ニ美麗ナル愆息所アリ。彼此ニ高槽  
アリ。高壁ニテ數室ニ分ツ。其最モ拔群ナルハ園  
囿中ノ山頂ニアル圓宮ナリ。樹木整然トノ排列  
シ。嘉樹奇草區域ヲ異ニシ。其形狀人工。以テ天工  
ト奇ヲ競ヒ。巧ヲ爭ヒ。彼ノテサリ。一ニ於ケル  
有名ナルテム。及アトニスノ園ハ希臘及羅甸



詩人ノ常ニ大ニ賞讃スル所ナルモ敢テ及フヘ  
キニ非サルナリ。

此ノ如キ諸建築及偃息所中ニ於テ最モ超抜ナ  
ルハ内裡住居スル所ノ宮殿ニノ屋脊高ク天ヲ  
衝ク堅壁ニテ圍繞シ画彩ニテ粧飾ス入口ニハ  
廣キ銅製ノ十五階アリ其下脚兩側ニ番所アリ  
同形ナリ各番所四角ニノ廣キ戸廣キ窓アリ満  
壁ニ弓矢ヲ飾ル屋脊四方ヨリ起リテ一中點ニ  
會シ鍍金ニテ被フ而ノ四邊金槌ヲ架ス  
番所ノ側ニ園アリ壁ニテ閉ツ四隅ニ八角ナル

遊戯所アリ其屋脊銳尖ニノ突起ス園中ノ景色  
詳記スルヲ能ハス銅階ノ末端ニ前門アリ双方  
ニ美麗ナル八柱アリ金板ヲ以テ被フ草花ノ画  
ヲ彫刻ス屋脊ノ中點稍高シ周縁彫刻精緻ナリ  
全部金彩燦爛タリ板敷ハ平滑ニノ琢磨スルカ  
如シ前門番所ノ後ニ高ク廣キ地アリ地上大理  
石ヲ敷ク之ヲ熟視スルニ驚クニ堪タリ  
宮殿ノ前面ハ他ノ建物ニ浴テ突出シ門ハ大ニ  
濶シ兩側ニ大柱立ツ全部彫刻アリ上縁ハ大ニ  
傾ク壁ハ門ヲ挟テ左右草花ノ画ヲ彫刻ス屋脊



ニ金ヲ鍍ス其末端ハ金樋ニ接ス殊ニ兩隅ニ龍ヲ置ク

第一屋脊上ニ第二屋脊張出シ十六柱上ニ安ス此内五大堂アリ各室ニ重窓アリ日本將軍ハ六年毎ニ百十六里ヲ經テ京都ニ来リ以テ内裡ヲ慶賀ス此旅行ノ前年ニ之ヲ沿道諸國ニ公告シ道路ヲ修理セシム宿泊二十八所内二十ヶ所ハ城郭アリ以テ旅舎ニ當ツク一ンラードカラムノル氏曾テ東印土商會ノ領事ニテ日本將軍ニ使節タリシ中則寛永三年十六百二十六年

將軍上洛  
寛永三年八月  
秀忠公  
家光公

京都ニ逗留セリ其紀事中ニ曰ク日本將軍ハ内裡ニ慶賀セントスルニ方テ荷蘭使節ニハ拜謁ヲ許セリ但シ暹羅及葡萄牙使節ニハ敢テ之ヲ許サハリシナリ是ニ於テカラムノル氏ハ執政及將軍ニ拜謁シ職務ヲ遂クルヲ許サレタリ諸事整頓將ニ平戸ニ歸ラントス而ノニ平戸候及内閣吏覺右衛門殿ノ周旋ニ因リ日本將軍ト内裡トノ應接ノ行装ヲ拜見スルヲ得タリカラムノル氏前夜ニ其同伴人ト共ニ將軍ノ居ニ近キ所ノ一屋ヲ借り宿ス翌日即チ十月二十

九月廿天皇ニ條城ニ幸ス



五日。將軍及内裡此地ヲ通過スヘキナリ。人民群  
集道路ニ充塞シ大ニ通行ヲ難ノリ翌朝唯人員  
充滿スルヲ見ルノミ將軍ノ居ト内裡宮殿トノ  
間ノ街上ニ白砂ヲ敷ク各戸前ニ柵ヲ構ヒ番人  
アリテ之ヲ警固シ敢テ人ノ柵外ニ出ルヲ許サ  
ス此警固ノ士ハ一ハ内裡ニ属シ一ハ將軍ニ属  
スルナリ各士濶キ白衣ヲ着ケ腹ヨリ墜テ地ニ  
接シ黑漆ノ笠ヲ頭上ニ戴キ腰ニ双刀ヲ佩ク手  
ニ鎗ヲ執ル日本人之ヲ長刀ト名ク此警固ハ日  
本全國ヨリ集リ来ル歩兵騎兵ニノ二日前ヨリ

京都ニ會シ露宿シテ非常ヲ警ムル所ナリ。賈人  
輩群ヲ爲シテ諸般ノ食物ヲ販ク窓及屋脊ハ監  
吏ノ檢點スル所ナリ。日出ニ衆シテ先ツ立派ナル行装ニテ將軍及内  
裡ノ儀從ヲ見ル内裡ノ輿夫ハ其用具ヲ四角ナ  
ル漆器ニ入レ荷ヒ鍍金セル具足ヲ着シ將軍ノ  
居ニ赴ケリ警固嚴重ナリ之ニ次テ四十六挺ノ  
駕籠アリ内裡ノ宮女ノ衆ル所各四人ニテ之ヲ  
荷フ此駕籠ハ白木ニテ造ル所高サ一尋黃銅ニ  
テ飾ル全面綠色漆料ニテ画彩ス此駕籠僅カニ



過キ去レハ。次テ他ノ二十挺ノ駕籠アリ。是黒漆  
ニテ塗り鍍金セルナリ。亦各四人ニテ之ヲ荷フ。  
宮女盛装シテ謹慎セリ。更ニ二十七挺ノ衆物アリ。  
百八人ニテ荷フ。從者皆壯實ニ。同一様ニ白  
装ナリ。衆物内ニハ内裡ノ近侍ノ貴人アリ。戸及  
窓ヨリ外ヲ見ルヘシ。衆物ノ前ニ強壯男子アリ。  
白絹ヲ張り彩画アル日傘ヲ捧ケテ。衆物ヲ蓋フ。  
④次テ貴人二十四人騎馬ナリ。前頭ニ小ナル漆帽  
鳥帽ヲ戴ク。其外套ハ洞袖ナリ。袴ハ精緻ナル縞  
子ニテ製ス。長ク狭ク裾褶アリ。金銀糸ヲ以テ巧

ニ織成スナリ。腰ニ鍍金セル双刀ヲ佩フ。中間ニ  
眞珠ヲ飾リ其末端ハ馬ノ脇ニ墜ル刀鞘ハ漆塗  
ニテ巧ニ金線ヲ拵ス。馬首ハ小ナリ耳及腹共ニ  
小ナリ。駕御ニハ最モ適セル容貌ニテ。歐羅巴人  
ノ大ニ好ム所ナリ。鞍ハ鍍金シ。席皮上ニアリ。更  
ニ飾ルニ紅色絹糸ヲ以テス。額上ニ鍍金セル角  
ヲ當フ鬣ヲ飾ルニ金銀糸ヲ以テ纏フ。胸及尻ニ  
紅色ノ絹綯ヲ張ル。鍍蹄ニ代ルニ紅色絹ニテ製  
セル沓ヲ以テス。各馬二人ニテ之ヲ曳ク。二個ノ  
大ナル日蓋ヲ張ル。一騎兵毎ニ從者八人。皆白衣



ヲ着ケ。双刀ヲ佩フ。歩法整然トシ。内裡ノ宮殿ヨ  
リ將軍ノ居ニ向テ進行スルナリ。  
愈久クシテ警固ノ士愈增多シ。既ニノ三輦来レ  
リ。共ニ二大黒牛ニテ之ヲ引カシム。紅色絹ノ綱  
ヲ被ラシム。白衣ヲ着クル。四御者ヲ一牛ニ配ス。  
各輦高サ四尋。長二尋。幅一尋ナリ。黒漆金彩燦然  
タリ。三窓アリ。高價ナル帷ヲ垂ル。入口ハ後側ニ  
アリ。立派ナル宮殿ノ門ニ異ナラス。左右ニ番人  
アリ。車輪ニハ金縁ヲ附シ。木挺ニハ金條ヲ具ス。  
天井ハ穹窿ナリ。前後ニ粧飾アリ。宮殿ノ状ニ似

タリ。屋脊ハ金板ニテ葺ク。凡天井ハ黒漆塗ニテ  
内裡ノ記章ヲ現ス。此三輦内ニハ皇妃三人ヲ置  
ク。夥シキ隨從ノ人輦ノ近側ニアリ。各輦後ニ鍍  
金セル踏臺ト一對ノ上階アリ。各輦ノ結構ナリ  
。其價巨額臆測ス可ラス。蓋シ百九十萬九百ギ  
ユルデシナリト云フ。  
夥シキ從者アルノ外。此三妃ニハ侍女多ク。衆物  
二十三挺。各白木製ニテ黃銅ニテ飾リ。四人ニテ  
荷ノ所ナリ。兩側ニ漆ノ者アリテ。衆物毎ニ日覆  
ヲ掲ケ。蔭ヲ設ク。



此女群通過ノ後内裡ノ近侍貴人六十八人騎馬  
ニテ二行ニ排列ス此騎馬者ノ歩法大ニ前者ニ  
異ナリ一騎馬毎ニ隨從多人アリ之ニ次テ進物  
ヲ荷フ者極テ夥シ則チ鍍金セルニ刀外装ニ金  
ヲ鍔ル製作精巧ヲ極ム火器一具非常大ナル時  
針盤一黄金燭臺一對黑檀柱二本黑檀机三脚彫  
刻精巧金箱ヲ撒スルノ書卷ヲ載スルノ多シ別  
ニ此ノ如キ者四脚但シ稍大ナリ黄金鉢ニ枚漆  
塗ノ上沓一對

三此ノ如キ進物ノ次ニ驚クヘキ貴價ノニ輪車ニ

輛アリ是前ニ三妃ノ衆ル所ニ異ナルヲナシ但  
シ將軍ノ記章ヲ現シ金輪ニテ圍ムヲ異ナリト  
ス前車ハ將軍左大臣源齊忠公後車ハ世子右大  
臣源家光公ナリ此二公ニ前行スルハ近臣徒歩  
スル者八十對各双刀ヲ佩ヒ一長鎗ヲ執ル是將  
軍ノ護兵ナリ日本人之ヲ侍ト稱ス皆貴族ニテ  
勇壯剛強ナリ又將軍ノ車ニ浴テ勇士八人步行  
ス四人ハ四角ナル檀木ノ棒ヲ持チ四人ハ鍔捧  
ヲ以テ道ヲ用ク又美麗ナルニ馬アリ其粧飾ノ  
美麗ナル幾何價ナルヲ知ラス各車ヲ曳カシム



側ニ八軍人アリ弓矢及鎗ヲ執ル  
老幼ニ將軍ノ後ニ整然タル位置ニテ兩第及全  
國ノ大小候伯相從フ其員百六十四名ナリ各々  
行装ヲ鎗リ從者アリ馬及駕籠アリ各々隊ヲ為  
シ其身位ニ應シテ相當ノ粧鎗アリ先ツ將軍ニ  
次クハ尾張候紀伊候及水戸候ナリ共ニ老將軍  
ノ第ナリ次テ松平筑前守是加賀ノ一大候ナリ  
松平薩摩守是薩摩ノ太守ナリ松平ヨシドノ松  
平下野守松平キユオンホノジヤウ駿河大納言殿ナリ  
以上十候ハ將軍ノ車ノ後ニ近接シ各々順次ヲ

紊サス皆家臣從僕ヲ伴フ  
其他ノ百五十四候ハ二行ニ併列シ進行ス而シテ  
大候ハ右側ニ就キ小候ハ左側ニ就ク抑モ日本  
人ハ右側ヲ上位トスレハナリ就中盛ナルハオ  
ウツイドンネ及オウラドンネナリ甲ハ老將  
軍ノ第一執政ナリ乙ハ幼將軍ノ執政ナリ後從  
ハ軍卒二百對ナリ  
更ニ新輦六輛アリ其大ナ前者ニ半ス但シ構造  
相同シ皆一牛ニテ曳ク此内ニハ内裡侍妃ノ乘  
ル所ナリ次テ六十八人ノ貴人アリ各々勢ノ從



者アリ。各個ノ四輪車内ニハ内裡ノ秘書記アリ。  
美馬三十七騎隨フ之ニ次テ駕籠十五挺。黒棒ヲ  
附ス。更ニ黒棒駕籠十三挺アリ。漆塗金彩燦然タ  
リ。更ニ十八挺ノ瀝青黒塗棒アリ。輿夫多致相紛  
亂ス。日覆ヲ持ツ者四十六人。副手アリテ交代ス。  
次テ五十四人ノ一隊アリ。衣装異様ナリ。樂隊奏  
樂以テ内裡ヲ慰ムルニ供ス。各様ノ器ヲ合奏シ  
譜曲ニ應ス。管ヲ吹クアリ。孟ヲ叩クアリ。喇叭及  
鼓アリ。絃アリ。歐羅巴人ノ曾テ見聞セサル所ノ  
器ナリ。

此樂隊アリテ始テ内裡鳳輦アリ。大ナル四角室  
ナリ。扉アリ。屋脊ノ尖ニ鍍金セル塊アリ。純金製  
ノ鳳アリ。大ニ其翼ヲ張ル。以テ室ヲ覆フテ蔭ヲ  
為ス。其高サ一尋半。周圍彫刻極テ精巧緻密ナリ。  
角ヲ包ムニ純金ヲ以テス。其價昂ス可ラス。周圍  
彩色アリ。天青色ナリ。周圍ニ日月及星辰ヲ現ス。  
内裡ノ貴人五十人。長キ白衣ヲ着ク。黒色帽ヲ戴  
ク。長キ棒ニテ内裡鳳輦ヲ荷フ。其前ニ從者二十  
對。衣装羅馬様ニ依ル。頭上ニ歐羅巴帽ヲ戴ク。一  
手ニハ鍍金セル長刀ヲ持チ。一手ニハ楯ヲ持ツ。



其中間ノ輪内ニ多矢ヲ立ツ。各人日覆ヲ執テ蔭  
ヲ取ル。是皆内裡ニ近侍スル人ナリ。其後ニ強男  
五十二人大ナル金櫃十三ヲ荷テ更ニ後從五百  
人白衣ヲ着ケ六隊ヲ為ス。

聖隊通過シ終ル日既ニ没セリ。百事驚駭スル  
ノ外他ナシ。沿路ノ棧敷及家屋ニ人員充滿シ相  
壓死スルニ至レリ。或ハ壓倒セラレ或ハ蹂躪セ  
ラル。全街叫喚ノ聲アリ。騎馬縱横ニ驅逐シテ相  
往來シ。馬蹄ニ蹴ラル者アリ。損傷出血スル者多  
シ。此混雜ニ衆シテ。掏摸横行シ。手裡ニ小刀ヲ持

テ觸ル所ノ者ヲ截リ取り。竊カニ之ヲ奪去ス。或  
ハ卒然トメ毀傷シ。死ニ至ラシムアリ。或ハ我身  
倒レテ他ヲ壓シ。後者之ヲ知ラス。愈之ヲ押ス。  
或ハ相鬪争シ。全街蹄泣シ。全都ヲシテ血浴ニ陥  
ラシメリ。諸省ヨリ帰家セントスルノ衆物通路  
ニ途ヒ乱妨人之ヲ路ニ要シテ奪ヒ去リ。貴人王  
候ノ別ナク馬ヲ截リ。駕籠ヲ踏碎キ。從者ヲ毀傷  
シ。恣ニ惡事ヲ為ス。モ之ヲ制スルヲ能ハス。  
ク。シテロードカラムメル氏ハ。其同伴人ト共ニ棧敷ニ於  
テ前ノ如キ一驚事ヲ見タリ。若シ夫レ茲ニ徹夜



九月六日天皇三條  
城ニ幸ヌ十日車  
駕宮ニ還ル

モシナラハ必ラス殺害ヲ免カレサリシナルヘ  
シ其騷亂スルニ方テヤ全街寸土ヲモ見サルニ  
至ル幸ニノ損傷ヲ蒙ラスシテ旅舎ニ歸ルヲ  
得シハ神ノ呵護ニ因ル所ナリト云ヘシ  
内裡將軍ノ居ニ滞留スルヲ三日夜是老幼二將  
軍又其第等尊奉敬事スル所ナリ膳部ハ執政ニ  
ノ京都ノ守護ナルシユガドノ主宰スル所ナ  
リ又ヨリカモサマ小堀遠江守中村左衛門間  
野三良左衛門之ニ關セリ内裡ノ每膳百十四菜  
ナリ内裡ノ三后妃ニハ其膳部ハ老帝ノ執政ナ

ワイドノノ宰スル所ナリ又執政播磨殿キチニ  
モンドノシヨイセロンドノ及四郎太殿之ニ關  
セリ更ニ幼將軍ヨリ内裡ニ銀三千枚黄金刀一  
對錦二百卷縹子三百卷租絹一萬二千磅カラム  
バク一個麝香五壺象馬十疋諸具ヲ備フ内裡ノ  
秘書記ニハ銀三百枚時服十二枚但シ老將軍ヨ  
リノ進物ハ稍之ヨリ減ス  
又京都ハ日本人カブユマト称ス分テ上京下京  
トス下京ハ伏水ニ連接ス家屋連續シテ數里ニ  
亘ル内裡ノ宮殿ハ上京ニアリ又別ニ驚ク一キ



宮殿アリ。千五百八十六年ニ於テ、大同様ノ建築  
ナル所ナリ。天正十四年。綴子、天鷲絨、金絲ヲ以テ  
織成スアリ。其室ノ壁ニ純金ヲ貼ス。宮殿多部ハ  
高價木材ヲ以テ構フ。他ハ美ナル大理石ヲ敷ク。  
宮殿前ニ廣濶部アリ。將軍ハ茲ニ於テ劇場ヲ開  
キ。技ヲ演セシム。悲歎及歡樂ノ状ヲ示ス。  
區此ノ如キ遊技ハ日本人ノ巧妙ナル所ナリ。精巧  
ナル作者ニ乞ヒカラス能ク韻調ニ合シ。舞曲ヲ  
演ス。其芝居ハ尋常致局ニ分ツ。後端ニ於テハ全  
局ノ大概ヲ領知セシム。然レモ黙シテ敢テ之ヲ

説カス。看官ヲシテ其結局如何ヲ臆測セシム。既  
ニノ混雜事件紛起シ。愈久ヲシテ愈錯雜ス。是看  
者ニ結局ヲ假想セシムルナリ。是ニ於テ意表ノ  
事件起リ。悲喜相分ルノ端ヲ設キ。漸クニノ結果  
ニ至ルナリ。其間ニ俳優舞手踊者相交ハル。歡樂  
ノ曲ニハ人生禍福應報勸善懲惡ノ意ヲ標シ。悲  
哀ノ曲ニハ哲人不幸ニノ冤ヲ含テ死ニ就クノ  
状ヲ演ス。  
日本人ノ演技ニ巧ナルヲ猶舊時希臘人及羅甸  
人ノ如シ。況ニヤ之ヲ創草スルニ於テハ最モ感



タラゲジーン  
コノジーン

スヘキナリ。茲ニ演劇ノ前後起源ヲ論スル衆説  
紛々タリ。但シ多クハ曰ク。タラゲジーンハコノ  
ジーンヨリ早く起レリト。タラゲジーンハコノ  
詳説アリ。而シテ此タラゲジーンナル語意ハ學者  
ノ大ニ争論スル所ナリ。或ハ曰ク。此語ハ希臘語  
ノ山羊ニ出ツト。蓋シ山羊ノ語中ニハタラゲジ  
ノ初四字ヲ含メハナリト。此説ニ加擔スル者  
多シ。抑モ愁歎演劇ノ源ハ異神バツキユスヲ追  
尊スルニ起ル。蓋シ山羊バツキユスノ葡萄園ヲ  
大ニ損害シタルヲ以テ。其山羊ヲ殺シ之ヲ神前

卓上ニ致シタルニ因ルナリ。羅馬ノ博士マルキ  
ユステレンチウスハルロ氏尚之ヲ証ス。則チ俳  
優ノ山羊ヲ尊奉スル所以ナリト。然レモ又一説  
アリ曰ク。此語ハ塗料ノ義ヲ取ル。希臘ニテハ之  
ヲトリユガト称ス。以テ俳優ノ口唇ヲ塗ルナリ。  
又希臘テスピスヲ鼻祖トス。此人杖ヲ車上ニ演  
セリ。則チ羅甸詩人ノ詩アリ。  
世人曰ク。スピスハ未だノ所作ヲ演セリ。  
悲調ノ歌曲ナリ。車ヲ運轉シテ之ヲ演ス。車  
ノ汚垢其人ノ口縁ヲ汚セリ。蓋チキ車上ニ



演セリ。

悲歎枝ノ要用ナルハ舊時ノ詩人チモクレス氏  
之ヲ詳説セリ曰ク此枝ハ人生悲哀ノ状ヲ寫出  
スルヲ以テ人若シ貧困ナルハ方テハテレヒ  
ユスノ貧苦ノ状ヲ想像スヘシ又子ヲ喪フノ父  
ハ無子ノニカベテ想像スヘシ多事騷擾ナルニ  
方テハアルタマヘシノ狂顛セル所以ヲ追想  
スヘシ眼ヲ傷フルヲアラハピナリウスノ盲ト  
ナリボロクテリスノ趁跛トナリシヲ追想スヘ  
シ是ヲ以テ艱難辛苦ニ過フ片古人耐忍ノ意ヲ

追想シ大ニ汝ノ心ヲ慰ムルニ足ルヲアルヘシ  
然レモコノジリニ就テハハルロ曰クアツテニ  
少年輩ハ常ニ村落ヲ巡廻シテ盛ニ遊嬉歡樂ス  
ルヲ風習トスコノジリハコノニ出ツコノハ希  
臘語ニテ村落ノ義ナリオデハ歌ナリ此技漸次  
ニ盛昌シ終ニ某ノ時某ノ地ニ於テ一場ヲ開キ  
衆人群集中ニ於テ之ヲ演シ觀ニ供セリ蓋シ觀  
者ヲシテ相交遊歡樂セシムル為ナリシセロハ  
此ノ如キ枝ヲ名ケテ活歴史風俗ノ鏡事實ノ影  
像ナリト云フ



亞希臘人中。エウポリス。セーアチニユスアリスト  
パネス。及メナンデルヲ以テ巨擘トス幸福ナル  
歡樂劇ヲ妙文ニテ記シ大ニ名ヲ一世ニ轟カセ  
リ。後希臘ヨリ俳優ヲ以太利ニ舟送セリ。此地ニ  
テハバキユヒウス。ブラウチユス。及テレンチウ  
ス等巨擘タリ。各々新技ヲ演セリ。  
舊ヨノシーンヲ以テ第一等ト為ス。ヘキニ似タ  
レ。其技大ニ粗笨トナリ。且ツ時事ノ長短可否  
ヲ明ラカニ技ニ演シ。且人ヲ称スルニ本名ヲ以  
テス。抑モ事實ヲ演スルハ衆人ノ大ニ喜フ所ナ

レハ。則チ官吏ノ短所ヲ鳴ラシ。事ノ不都合アレ  
ハ之ヲ演スルニ至レリ。殊ニ詩人ハ自家ノ思想  
ヲ以テ之ヲ抑揚シ。其極本人ノ失策錯誤ノミナ  
ラス更ニ類似ノ事ヲ附會スルニ至レリ。サニホ  
ーリオンニ於テ一劇場ヲ開キ大ニ世ノ喝采ヲ  
得タリ。蓋シ其技大ニ租暴ニ亘リ。結果及豪業ニ  
制限ナク。俳優人定致ナシカラチニヒユスニ至テ  
早ク五匁ヲ定メ而シテ復タ每匁三人ヲ要セス。再  
後アリストパネスニ及テ。始テ此技ヲ完全セリ。  
但シ希臘ノ威力愈増加スルニ及テ。此人民ノ自



由カヲ壓制シ。大ニ俳優演技ノ制ヲ定ム。是ニ於  
テ面目ヲ一變シ。當時ノ真狀ヲ觀ント欲スルモ。  
猶燭ヲ隔テ物ヲ見ルカ如キナリ。後新ユノジ  
起レリ。羅甸人ニ於テハリヒウスアンドロニキ  
ユスヲ鼻祖トス。自ラ筵上遊劇ヲ教授セリ。パキ  
ユビウス大ニアンドロニキユスノ短所ヲ補綴  
シ。アラウチユス及テレンチウスニ及テ之ヲ完  
備セシメリ。

譯者案スルニ。往古希臘國ニ。紀元前五百三十  
六年。我紀元百二十年。セスピスト云フ人アリ。

其國民等葡萄ノ成熟ヲ祝ヒ。酒ノ神パキユス  
ヲ祭リ。酒筵ヲ設クルハニ方テ。座中ヨリ能辨  
ニシテ滑稽ヲ善クスルモノ一人ヲ撰ミ。種々  
ノヲ演說セシメ。神ヲイサメ。諸人ヲ悞シマ  
シムルヲ發明セリ。之ヲ歐羅巴演劇ノ濫觴  
トス。其後セスピス一個ノ車ヲ製リ。演技者ヲ  
載セ。諸村ヲ巡廻シテ。祭ヲ助ケシメ。夕リ是ヲ  
戲柵ノ權輿トス。以上藝術叢談第二云々本文  
ノ参考ニ備フ。

抑モ日本人ハ其悲哀及歡樂ノ技ヲ演スルニ敢



テ希暎人ニモ羅旬人ニモ譲ルヲナシ更ニ巧ニ  
憲婦情郎憤怒ノ老翁詐欺ノ家僕他ヲ欺クノ娼  
妓遊蕩少年ノ状ヲ摸シ又其高慢横柄ナル公候  
ヲ演スル能ク真ニ迫ルハ遙カニ歐羅巴人ニ勝  
ル所ナリ然レ氏此ノ如キ状ハ決シテ大同様ノ  
宮第ノ如キ整然タル地位ニ於テ演スヘキニア  
ラサルトナリ此場ノ双方ニ二個ノ美摺ト四個ノ  
廊下アリテ高ク聳ユ  
又致様ニ屈曲シ高壁ニテ區劃スルノ馬埒アリ  
觀者群ヲ為シテ御者ノ周圍ニアリ御者ハ日本

風ニ脚ヲ折テ坐ス頭上ニ甲ヲ置キ之ニ銅丸及  
孟ヲ掛ク又地上凹所ニ置キ之ヲ叩キ鳴ラス  
嚴ニノ殆ント耳ヲ聳ナラシム馬埒ノ末端ニ二  
本ノ強キ柱アリ太キ繩ヲ張ル此張繩ノ稍後ニ  
重大四角ナル柱ヲ立ツ之ニ大旗ヲ掲ケテ長ク  
挺出ス一日本人其柱ヲ抱キ右手ニテ一人ノ胸  
ヲ指示ス其人頸ニ四角ナル板ヲ掛ク一鷺鳥ノ  
状ヲ記ス此人右手ヲ柱上ニ置キ左手ヲ刀ニ倚  
テス第三人側ニ立ツ結節アル鞭ヲ附スル長キ捧  
ヲ右手ニ握ル以テ競者ニ示スノ標ト為ス其後



ニ三人立ツ共ニ帽ヲ戴ク其端ニ黑色羽毛ヲ束  
又是甲乙優劣ヲ點視スル監吏ナリ其褒賞ハ鞍  
一具或ハ銀具ヲ備フル鍙ナリ競走者ハ腹ニ薄  
キ絹衣ヲ着ケ脇ニテ合ス袖ハ臂下ニ及ヒ袴ハ  
掲ケテ膝上ニアリ脚ニハ脚絆ヲ纏フ競走中伶  
人音節ヲ合シテ孟ヲ鳴ラシ其響騷然タリ標示  
ヲ見テ馬及人則チ歩ヲ進ム馬ハ一索ヲ以テ口  
圍ヲ纏ヒ走者之ヲ左手ニ固持ス馬ノ四脚ヲ揃  
テ一躍シテ繩ヲ踰ルヲ勝レリトス則チ上ノ褒  
賞ヲ得ルナリ此競走ニ於テ褒賞ヲ得タル者ニ

非ナルヨリハ將軍ノ侍臣ニ列スルヲ得サルナ  
リ  
内裡ハ神孫一系連續ノ遺胤ナリ故ニ往時ハ全  
國人之ヲ尊奉シテ神事セリ此ノ如ク貴重セラ  
ルヲ以テ全國靜謐ナリ千五百五十年ニ及テ政  
天文十九年綱弛解シ内國争亂起レリ其位ヲ退クノ後ニ於  
テモ争亂止マズ全國血ヲ注カサルナク愈紛乱  
シ強ハ弱ヲ制シ大ハ小ヲ襲テ其領地ノ所村ヲ  
蹂躪シ相吞噬シテ窮極ナク五十年間全國血浴  
ニアリ



要其狀左ノ如シ。抑モ内裡ノ貴重ナルハ身日光  
ニ接セス。足地ヲ踏マス。毛髮及爪ヲ截ルヲナシ。  
〔此習慣ハ數百年來然ル所ナリ〕今ヲ距ルハ百十  
八年前ニ二皇子アリ。第八奮慣ニ倣フテ兵馬ノ  
權ヲ有シ。許多ノ亂黨ヲ鎮撫シ。諸侯ヲ制御ス。兄  
ハ父ノ崩スルノ後位ニ即クヲ望ムト。虽之ニ奉  
事スル者ナシ。其母后ニ子ヲ愛スルヨリ。兵馬ノ  
權ヲ分テ内裡ヲシテ。其一半ヲ領セシメシカ。爲  
ニ三年毎ニ交代相有セシメントセリ。然ルニ第  
之ヲ甘受セス。三年ヲ過クルモ。尚其權ヲ固握シ

テ兄ニ讓ラス。且竊カニ大諸侯ト議ヲ合シテ。大  
ニ勇威ヲ逞フセリ。是ニ於テ母后ハ一將ヲ撰ヒ  
命ニ戻ルノ子ノ生命ヲ失ハシ。謀リ則チ久  
シカラスノ事ヲ成シカ。爲ニ兵士ヲ招集セリ。  
是内裡ニ對スル亂黨ノ起源ナリ。既ニノ其子崩  
セリト。虽爭亂尚止マズ。强者弱ヲ凌キ。相割掾シ  
王家ノ政令行ハレス。内裡ノ威權凋零シテ。日本  
全國終ニ將軍ノ手ニ歸セリ。新内裡ハ將軍ノ諸  
歳入及威權ヲ自在ナラシムルニ關セス。之ニ抗  
セリ。終ニ内裡ハ撰擇セル大將軍〔日本人〕之ヲ公



方ト云フヲシテ將軍ヲ殺サシム。此戰勝者ハ敗績人ノ悲歎スヘキ結局ヲ倣ハス。支揮ヲ恣ニシ兵馬ノ全權ヲ握レリ。

是ニ於テ戰爭復タ起レリ。大小候伯分裂シ日本全國土崩瓦解ニ至レリ。此事容易ニ靜謐ニ歸セズ。候伯互ニ利ヲ貪リ營ニ甲國乙國ト争フノミナラス。各村各街皆掠奪ヲ事トセリ。敗北ノ者ハ損害ヲ蒙ル。僅クナラス。家屋社寺更ニ乳兒モ敢テ免カル。ナシ。劍鎗以テ生靈ヲ殺シ火力以テ家屋ヲ焼ク。前日ノ大市モ忽チ灰燼トナレリ。

新公方ハ大ニ上進シテ終ニ將軍ニ登レリ。然レ此少時ニ過キス何トナレハ此時亂黨絶エス。公方ノ軍勢ヲ依托スル所ノ三好殿ハ奈良ノ君ダヨシドノト相誓約シ兩軍合セテ一萬二千人ナレ。上ニ説クカ如シ。此多勢京都ニ充滿跋扈セリ。三好殿ハ強勇ナル護兵ヲ伴テ市中ニ入り。公方ニ向テ格外ノ恩惠ヲ拜謝センカ為ニ京都近邊ノ寺院ニ之ヲ請招シテ饗應セントス。蓋シ陰ニ之ヲ弑セシト謀ルナリ。然レ此公方此事ヲ偵知ス。則チ都下ニ兵卒ヲ配置スルヲ以テ之ヲ悟



ルナリ。是ニ於テ遁走ノ策ノ回ラセリ。既ニノ途ニ就ク。然レモ其從者ノ不注意ナルヨリ。忽チ喚声カレリ。

○(三)好殿都下ニ入り。宮殿ヲ襲フ。其戦鬪スルノ前ニ於テ。一使ヲ公方ニ遣リ。其言ニ曰ク。君側ニ在テ專横放肆ナル諸人ノ首級ヲ賜ルヘシ。公若シ之ヲ領養セハ則安穩ニ速カニ我兵ヲ退クヘシト。而シテ使者ヨリ三好殿ノ死罪ニ處セシト欲スル諸人ノ名ヲ書記シテ之ヲ示セリ。公方ノ近侍者此書ヲ請取り大ニ怒テ之ヲ裂キ走テ宮中ニ

入り。公方ノ前ニ於テ。懷劍ヲ拔キ。自ラ腹ニ刺シ。膝下ニ倒レリ。

此ノ如クニ他ノ六人モ自裁セリ。蓋シ敵兵ノ来リ妨ケシヲ恐レテ戸ヲ鎖ツ。然ルニ老侍臣ノ子。其父ノ血ニ塗ルヲ見テ。走テ戶外ニ出テ。敵兵ヲ防キ。或ハ之ヲ截リ。或ハ之ヲ傷リ。而シテ終ニ群人中ニ死セリ。

然レモ三好殿ハ火ヲ四方ニ放ツ。公方自ラ謂ク。燔死スルヨリハ寧ロ鬪死スルヲ勝レリトス。則チ其母ノ文指スルニ拘ラス。二百人ヲ率テ脱出

永祿元年青松永  
久秀等將軍美輝  
ヲ弑ス



ネルヒ

シ。各劍ヲ手ニス。公方率先シテ進ム。而ルニ久シ  
カラヌノ頭及胸ニ三大創ヲ蒙ルリ。地ニ倒レリ。  
出血湧クカ如シ。從者皆圍死シ。積屍山ノ如シ。其  
慘狀言フニ堪ヘス。此ノ如キ一他例ナキニアラ  
ス。則チ往時ワルスフラミーミンゲン。舊時ノ希臘  
及羅旬記者ハ之ヲネルヒト稱ス。ノ勇戦是ナ  
リ。

ユリウスカーサル

ユリウスカーサル其一類例タリ。カーサル曾テ  
深林ヲ過キサムブレ河ヲ涉リ。三萬ノ兵卒一隊  
ノ騎兵ヲ引テ安全ナル丘上ニ陣ヲ固メントス。

ルニ方テ羅馬人恐ルヘキ勇威ヲ張リ。更ニアト  
ロイス及フルマンドイスノ助勢スルアリ。騎兵  
及銃午前驅タリ。此時サムブル河水深サ三尺。以  
テ烈シクネルヒノ騎兵ヲ攻ム。戦鬪頗ル激シ。羅  
瑪人迎接シテ放銃盛ナリ。ネルヒ兵全軍力ヲ合  
セテ一方ヲ衝ク。  
第一戦ニ於テ羅馬騎兵疾驅シテ追逐スカトサ  
ル難澁迷惑シ。敗軍ノ徵ヲ見テ奮激突戦。第九隊  
及第十隊ヲ以テ左翼ヲ張テ。アトロイス兵ヲ破  
レリ。其サムブレノ方ニ退クヲ逐タレ。之ニ達



スルヲ得スノ敗績セリ。又フルマンドイス兵ハ  
高所ヲ退テ川岸ニ陣ヲ張ル。則チ第十一隊及第  
八隊ヲ以テ之ヲ破リ走ラセリ。  
ネルヒ一兵ハ大将ボジユオグナチユスノ指揮  
ニテ羅馬人ノ陣ヲ襲フ。羅馬ノ敗食人ハ高丘上  
ニ在テフルマンドイス人トアトロイセルス人  
トサムブレ河ヲ越テ勝敗如何ヲ偵視セリ。既ニ  
ノ其敗ヲ見テ陣所ニ入り賊ヲ為ス。然レモ歸ル  
ニ及テ羅馬兵ノ丘上ニ陣取リスルヲ見テ皆四  
方ニ遁亡セリ。叫喚ノ聲天ニ達ストリール騎兵

宛ハカーサルヲ助ケテ羅馬陣所ノネルヒノ足下  
ニ在ルヲ見。又敗食人ノ狼狽シテ逃去ルヲ見テ  
羅馬騎兵ヲ襲フニ輕装ヲ以テス。此事カーサル  
ノ右翼ヲ以テ為スニ足レリ。則チ第十二隊ヲ以  
テ接應スルカ故ニ之ヲ禦クノ能ハス。將校多ク  
ハ大小ノ創傷ヲ蒙レリ。被此ニ於テ羅馬人之ヲ  
支フト至ネルヒ人ハ前及側ヨリ割シク之ヲ襲  
ヘリ。  
カーサルハ死ヲ決シテ一卒ヲシテ己レノ軍裝  
ヲ脱去セシノ。此時最モ激戦スル第一隊陣ニ走



リ入り。名ヲ通シテ其將校ノ勇氣ヲ鼓舞シ。更ニ  
一戰ヲ試ミントス。兵卒等ハカトサルノ現出ス  
ルヲ見テ大ニ奮起スル所ナリ。且ツ弟ニ隊ヲシ  
テ輜重ヲ防護セシム。副將ラビニユスハ假兵  
ヲ以テ虚勢ヲ張り。全カヲ盡シテ耻辱ヲ一洗セ  
ントス。  
ネルヒ兵復タ危険ヲ顧ミス。大ニ奮勇激戦シ。積  
屍堆ヲ為スニ至レリ。  
公方ノ二百人勇戦ノ状亦左ノ如シ。皆奮戦シテ  
斃ル。就中一少年アリ。甫テ十四歳ナリ。其勇猛敵

ヲ驚カスニ足ル。則チ勇戦自ラ創傷ヲ蒙ルリテ  
主ノ斃ルヲ見テ悲歎シテ其屍ヲ注視シ。喚テ曰  
ク我君賊手ニ斃ル臣豈ニ生ヲ盗マニヤ。我事既  
ニ終ル。豈ニ誓ニ背カンヤト。則チ劍ヲ擲テ懷劍  
ヲ以テ頸ヲ刺シ。更ニ復タ心ヲ刺貫ス。

敵軍火焰ノ及ハサル地ヲ選テ宮内ニ亂入シ。公  
方ノ母及女ヲ見テ残酷ニ之ヲ殺セリ。唯僅カニ  
二人ハ竊カニ遁レテ宮殿外ノ一小舎ニ隠ル。敵  
兵悉ク公方ノ貨財ヲ掠奪ス。近侍ノ嬪妾ハ多ク  
ハ貴族ノ女ナリ。皆遁レテ火焰未タ及ハサルノ

妾輝ノ母慶壽。



室ニ群集シ。叫號啼哭ス。敵軍侵掠スルニ方テ。或ハ其衣服ヲ褫キ。或ハ先ツ強姦シ。終ニ之ヲ截リ。或ハ強姦スルノ後携ヒ去ルアリ。或ハ直々ニ刺殺セルアリ。煙ニ窒スルアリ。火ニ入ルアリ。正妃ハ二三ノ侍女ヲ伴テ寺院ニ遁レタルニ。忽チ探知スル所トナリ。亦不幸ノ終焉トナレリ。宮殿ハ灰燼トナリ。滿宮ノ人或ハ刀死。或ハ燔死シ。免カル者ナシ。三好殿ハ公方及從者二百人ノ屍ヲ見テ。宮後空地ニ一墓所ヲ設ケ之ヲ埋葬シ。更ニ火ヲ放テ。宮殿屋舎ノ遺材ヲ盡ク灰燼ト為セリ。

衆僧來テ敵陣ニ請テ公方ノ遺骸ヲ日本式ヲ以テ其菩提所ニ改葬セリ。耶蘇教徒口デウエーキフ、口ユス氏日本カシガ島ニ在テ千六百六十五年記スルノ書中ニ曰ク。公方ノ一親友アリ。此騷亂ヲ聞テ馳テ京都ニ至リ。宮殿ノ遺跡ヲ見テ亂妨人ノ所業ヲ悲憤慷慨シ。更ニ公方ノ墓所ニ詣リ。自ラ割腹セリ。公方ト共ニ死シ。他地ニ於テ同生セントスルノ意ヲ表スルナリ。

公方ノ血族ニテ保生スルハ僅カニ二妹ト二女ノミナリ。二妹ハ既ニ久シク身ヲ寺院ニ寄寓シ。



尼輩ニ混シテ深ク隱匿セリ。故ニ幸ニメ探偵ヲ  
免カレタリ。ニ女ハ尋常紳士ノ家ニ在テ隱レリ。  
其外更ニカナドニユス御館アリ。先公方ノ季弟  
ナリ。亂ヲ避テ奔レリ。敵人之ヲ捕ヘテ僧トナシ。  
佛事ヲ営マシメントセリ。然レ氏之ヲ肯ンセサ  
ルヲ以テ御館ヲ幽囚セシニ終ニ之ヲ破テ口カ  
ノ城主ナル幡殿ニ身ヲ托セシ。上ニ記スルカ  
如シ。  
幡殿ハ諸候ヲ招集シ殊ニ信長ト合議シ。報讐ヲ  
謀レリ。蓋シ御館ヲ奉シテ公方ノ位ニ上ラシメ

ントスルナリ。此企謀ヲ成サシカ為ニ信長ハ六  
萬二千ノ兵ヲ率テ陣ニ臨ミ之ヲ四方ニ配シテ  
御館ヲシテ素願ヲ達セシ。日本ヲ主宰セシメ  
ントセリ。幡殿能ク其基礎ヲ定ムト。虽事ヲ成就  
スルノ力ナシ。故ニ信長ヲ我手中ニ置クナリ。  
上ニ記スルカ如ク。乱黨ヲ退治スルノ後先公方  
ノ季弟ハ位ニ上リ幡殿ハ勢ヲ率テ堺浦ニ赴キ  
信長ハ御館ヲ護シテ京都ニ留マレリ。幡殿堺浦  
ニ在ル片大ニ口デウエーキヲロウス氏ト親懇ヲ  
結ヘリ。是ニ於テ新公方及信長ニ媒介セラレ京

信長ヲ昭ヲ清  
水寺ニ奉ノ自ラ  
東福寺ニ陣ス



都ニ於テ公ニ耶蘇教ヲ弘ムルヲ得タリ。此事ヨ  
リシテ騒動僅サナラス。有名ナル僧徒ニシオキ  
シネスト。信長トノ間ニ議論ヲ生シ。日本佛徒ト  
ロデウエーキフロウス氏トノ間宗論嘵々タリ。  
然レ此ニシオキシネストハ魂魄死滅ノ證ヲ示ス  
一能ハス。此嘲弄ヲ秘シテ竊カニ幡殿ニ向テ恨  
ヲ抱ケリ。偶幡殿重病ニ罹レリ。此虚隙ニ乘シテ  
坊主信長ニ向テ幡殿ヲ諂ス。蓋シ其言證據ナキ  
ニ非サルナリ。是ニ於テ信長ハ老友ヲ恨ム。ア  
リ。幡殿全快スルニ及テ大ニ之ヲ詰リ。其宮ヲ退

去セシメテ年々収納ノ内ニ就テ二萬ジユカレテシ  
テ減額セリ。無罪ノ人曾テ恨ヲ抱クノ坊主ノ為ニ  
滿一年間大ニ厄難ヲ蒙ルレリ。  
然レ此後日信長ト幡殿面謁スル。アルニ及テ  
固ヨリ疎意ナキ。判然タルヲ以テ帝ニ舊額ニ  
萬シユカレテシテ復領スルノミナラス。更ニ新ニ  
一萬シユカレテシテ増加スルヲ得タリ。  
但シ幡殿此大額ヲ受クルモ久シク之ヲ保存ス  
ルヲ得ス。不慮ノ一事件起ルニ由テ終ニ之ヲ失  
セリ。則幡殿領地ノ域池田候ト境ヲ接スル地ニ



二城郭アリ。池田候近傍城郭ノ通路ニ碍アルヲ  
以テ之ヲ除カシテ請フ。聽カス。之ヲ請フ。切  
ニシテ終ニ暴慢ヲ加フ。幡殿能ク此暴慢ヲ忍フ。盖  
シ年々千五百シユカシテ己ニ賜フハ何ノ為  
ナルヤヲ回想スレハナリ。池田候猛兵ヲ以テ其  
一城ヲ襲フ。城中ニタリウスタカヤマアリ。直チ  
ニ事ヲ幡殿ニ報ス。此時幡殿ハ現今ノ職任ニテ  
タカリキユイムニ在リ。直チニ現在ノ兵ヲ引テ  
之ヲ赴ク。但シ之ヲ集ムルニ二百ニ過キス。更ニ  
其子ヲシテ五百ヲ率テ緘カシム。敵ハ短時ニ戰

ヲ終ニトスルノ意ナルヲ以テ多勢ヲ山後ニ隱  
シ。小勢ヲ示シテ幡殿ニ向フ。守城シテ防禦ヲ司  
トルヘキ者モ共ニ出テ戦ヒ為ニ偽計ニ陥レリ。  
幡殿ハ頭ニ曾テ葡萄牙ヨリ贈ル所ノ猩々緋ノ  
帽ヲ戴キ馬ヲ進メテ敵ニ接シ。之ト戦フ。既ニノ  
伏兵ニ圍マレ小勢ニテ一團トナリ。激戦ス。衆皆  
創傷ヲ蒙ルモ敢テ遁亡スル者ナシ。幡殿ノ子  
ノ援兵ヲ待ツニ未タ至ラサルニ及テ幡殿終ニ  
國死セリ。幡殿ノ子ハ之ヲ聞テ兵ヲ歸シテタカ  
クキユイムニ潛ム。



信長入京都。

信長ハ公方トノ間ニ不和起レリ。一ハ謂ク公方  
タラシムルハ我カ蔭ニ因ル所ナリト。一ハ謂ク  
彼興復ノ効アリト。虽自ラ日本ノ主タルニ非サ  
ルニ願思セス。豪慢人ヲ凌ク。余久シク之ヲ堪ユ  
ル能ハスト。互ニ不満ノ念アリテ。真極大戦争ヲ  
起セリ。公方ハ勉テ軍勢ヲ募集シ。信長ニ叛心ス  
ルノ諸將ニ約シ。誓テ彼ヲ制セントス。信長去テ  
尾張ニ歸リタレ。氏公方ノ軍備盛ナルヲ聞テ。衆  
ノ諫言ヲ容レス。兵ヲ引キ馳テ京都ニ進メリ。  
使者ヲ公方ニ送り。尚和平ヲ表ス。然レ氏觸ル所

火ヲ放テ兵ヲ弄セシム。從來ノ百街千街總テ灰  
燼ニ附ス。公方ハ構和ノ策ニ従ハス。唯曾テ誓約  
シタル諸將ニ依頼シ。愈信長ヲ挑ミ怒ラズ。是ニ  
於テ京都ニ入ルノ兵倍乱妨狼籍ナリ。最モ上京  
ニ於テ甚クシ。是貴紳ノ多ク住居スル所ナリ。屋  
宇崩潰ヲ免カレント欲スル者ニハ大金ヲ以テ  
之ヲ贖ハシム。但シ全軍ニ令シテ下京ニハ兵士  
決モテ入ル。勿ラシム。犯ス者ハ之ヲ重罪ヲ課  
ス。上京ニテ掠ル所ヲ以テ慰勞ノ料ニ供ス。  
一夜中ニ於テ上京ノ殆ント三分ノ一ハ灰燼ト



為レリ。翌日信長入京シ其残ル所ヲ焼ク。延焼ス  
ル一八千家ナリ。大寺院二十。小寺院八十。外河  
阿彌陀釋迦ノ二大寺亦夕共ニ烏有トナル。  
此焼失寺院中ニ一寺アリ。六十僧ヲ養フ。京都ニ  
出テ勸化シ。本堂再建ヲ謀ル。テマテニアルダ  
ルビユトナリ。

五 下京ハ一時無事ナリ。兵卒敢テ之ニ入ル者ナシ。  
是信長ノ全軍ニ令シテ之ニ入ルヲ禁シ。侵ス者  
ハ重罪ヲ課ス。一キヲ以テスレハナリ。然レ上  
京ノ火勢漸ク延テ下京ニ及フ。是エシユム寺ノ

有ル所ナリ。坊主火勢ノエシユム像ニ及ハシ  
テ配慮ス。抑モエシユムハ死者ノ靈ヲ苛責ノ地  
ニ導キ汚穢物ヲ焼キ棄ルニ及テ。阿彌陀ノ設ケ  
タル樂土ニ誘フナリ。此エシユムノ像ハ醜怪厭  
フヘシ。右手ニ三齒アリ。肉刺シテ執ル。坊主等火  
勢ノ此像ニ及ハシテ配慮シ。圖ヲ取テ火勢此  
寺ニ及フヘキヤ或ハ之ヲ安全ナル別地ニ移ス  
一キヤヲトスルニ示ス所ノ籤ニ曰ク。必ラス移  
遷セサル可ラス否サレハ火ヲ遁ル可ラスト。衆  
僧大ニ狼狽シ。近街ノ人相助勢シテ前ニ火ヲ免



レクル上京ニ此像ヲ運ヘリ。然レ氏信長全上京  
ヲ悉ク焼クニ方テ此工シユム像モ灰燼トナレ  
リ。而ノ其寺ハ信長下京ヲ焼カサルヲ以テノ故  
ニ災ヲ免カレタリ。  
然レ氏公方ハ城内ニ籠居シテ此ノ如キ亂暴ヲ  
坐視シ唯日々無事ニシテ速カニ加勢ノ至ルヲ待  
テ宥怒ヲ軟セントスルノミ然ルニ信長ハ四方  
ヨリ城ヲ困ミ迫テ講和シ城ヲ引渡サシメ且内  
裡ニ奏シテ自ラ公方ノ位ニ登ラント請フ但シ  
此結約ノ箇條大ニ公方ヲシテ困難ナラシムル



